
精霊と異世界人

アキライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊と異世界人

【Nコード】

N4952Y

【作者名】

アキライ

【あらすじ】

「その服装。あんたスローネ学園の生徒かい？」

約半年まで、俺は普通の学生だった

「・・・アキラ？」

何でココに転移したのか

「くっ、この化け物がー！」

何でこんなこと言われるのか

「一体何者よ・・・？」

それでも俺は

「バカな精霊とただの異世界人ですが？」

地球から異世界に転移させられた少年と、異世界で出会った精霊の物語

少年は、慣れない世界でどう歩むのか

初投稿です。未熟な部分を多いと思いますが、生温かい目で見守っていただくと幸いです。

一応受験生なので、投稿スピードについては不満があると思います
がご了承ください。

ブログ（前書き）

ご指摘があったので少し改めました

空行はどのような具合がよいのか分からないので、とりあえず改行を増やしてみました。

「これおかしくね？」と思った方は、遠慮なくご指摘してください

プロローグ

「その服装。あんたスローネ学園の生徒かい？」

「ええ、まあ」

馬車を運転していた男の人に急に質問され、曖昧に返事してしまった。名はマーガスさん。

「へえ、そうになるとあんたも精霊使いというわけか。・・・まさか隣で寝ている美少女はあんたの精霊かい？くうく、羨ましいね」

「そうですね、おじさんが思っているほど羨ましいことじゃないですよ。少なくとも俺はそう思っています」

何言っているこの色男。と言っているマーカスさんを無視し、俺の肩に頭を置いて寝ている少女へと目を移す。銀と言うよりも白銀に近い髪が、窓から入ってきた風で俺の目の前でなびく。彼女の腰まであるその髪は、バカにするように俺の視界を遮る。その髪を二つの意味でうつつうつしいと思ひ、手で払う。

1つ目は純粹に前が見えない。丁度よく振り向いたマーガスさんの顔がニヤついていたのは、気のせいだと思いたい。

2つ目は・・・無駄にいい匂いがする。コロンのような甘い香りじやなく、清潔なソープの香り。俺は慣れているからこれくらいじゃあ何ともないが、普通の男ならコレ+上目遣いで病院行きだな。原因？出血多量だろ。

「ルナ・・・、いい加減に起きろ・・・」

マーカスさんのニヤけた顔を思い出して、さすがに恥ずかしく思った俺は、眠り姫・・・もとい「ルナ・プラネット」を起こす。

少し経つと、その整った顔から、パツチリとした目がゆつくりと開く。

「・・・」

「おい、ルナさん？」

「・・・」

「・・・おい？」

返事がない。ただの人形のような。

「・・・アキラ？」

「お？返事した」

アキラとは俺の名前。「アキラ・シグレ」。漢字にすると「時雨暁」。

なんとなく分かるように、俺は日本人だ。しかしここは日本ではない。ましてや地球でもない。名前は知らんが、ここは異世界らしい。俺はいわゆる転移してきたのだ。転生ではないので、あっちの世界ではちよつとした神隠しだろう。しかし帰ることができないで、こうして現実を受け止めて今に至る。何故こうなったかは、後々語ろう。

「・・・何かあったの？」

「ああ、俺が社会的に死ぬか死なないかの瀬戸際だ」

「なら大丈夫ね」

「その根拠を聞こうか？」

「私は関係ないもの」

「せめてそこは「アキラは死なない」にしてっ！つかお前が犯人だろ！」

「犯人はこの中にいるわ」

「どこの少年探偵！？確かにいるね！お前だよ！お前しかいないよ！」

「これは集団犯行ね」
「いつの間にそんな大事件に！？謎が謎を呼ぶの！？」
「何を言っているの？真実はいつも一つよ」
「犯人も一人ね！お前の場合見た目も頭脳も子供だよ！」
「ひどい」
「俺のほうかひどい目に会っているよ！」
「じゃあ誰が犯人？」
「よし、ここで落ち着いて考えてみよう」
「アキラ？」
「俺は被害者」
「馬車のおじさん？」
「マーガスさんは傍観者」
「わた・・・、それじゃあ一体誰かしら？」
「言いかけたよね！？私つて言いかけたよね！？認めたくないの
かな！？認めたくない年頃なのかな！？」
「僕はキラなんかじゃない、信じてくれよ」
「関係ないよね！？キラさん関係ないよね！？急に出てきてキラさ
んもビツクリだよ！？とりあえず謝りなさい！デスノートに書かれ
る前に謝りなさい！」
「アークエンジェルに？」
「そっちのキラなの！？フリーダムなの！？」
「ストフリよ」
「どっちでもいいわー！！」

なんでこいつは地球の知識を知っているのだ・・・あ、前に話した
ことがあるからか。

気づいたら馬車は止まっていた。何事かと馬車のマーガスさんを見
れば、腹を抱えて爆笑していた。

・・・この野郎、他人事だと思って・・・。

マーガスさんの笑いが収まると、馬車は再び動き始めた。

「アキラ」

「なんだよ」

「鳥がいる」

「そうだな」

「可愛い」

「そうだな」

「今夜は焼き鳥がいいわ」

「食欲失せるわ！」

するとまた馬車が止まった。

「マーガスさん、ふざけてないで先を急ぎ・・・」

「おい、その馬車！命が欲しけりゃ止まれ！」

前を見ると、いかにも山賊の格好をした4人組みがいた。おいおい、これ以上俺の平穩を壊さないでくれ・・・

俺たち三人は大人しく降りた。ルナが降りたとき盗賊の目の色が変わった。

自爆したな・・・

「兄貴！あいつ上玉ですぜ！」

「ああ、しかもかなりの特大サイズだ！」

あいつらのテンションに反比例して、こっちのテンションは下がりはまりだ。マーガスさんに至っては、この世の終わりのような顔になっている。まあ、一般人はそうなるよな。

すると何か思い出したように、マーガスさんは希望の眼差しで俺を見つめてきた。

「なあ、あんた精霊使いだよな？なら、あいつらやつつけてくれよ」

少し興奮しているのか、小声にも関わらず、少し大きい。確かにそう考える。けどな

「残念ながら俺は転入生として学園に入る。よって、俺はよく分かるん」

間違っていない。だって俺は転移者。この世界に来て一年どころか、半年もたっていない。

よって、何故精霊が存在するの？今この世界の状況は？そんなこと聞かれても知らん。

ましてや俺のパートナーがアレでは、まともに関ることなんてできん。

「そ、そんなあゝ」

マーガスさんは崩れ落ちた。そんな中、盗賊たちは新たな発見があったらしい。

「兄貴！こいつ精霊ですぜ！しかもまだ未契約の！」

あーあー、ばれちゃった。

この世界には魔力がある。しかし人間には存在しない。どうやらこの世界で魔力を持つのは精霊のみらしい。

しかし精霊は魔力があるだけで、使うことはできない・・・と思う。でも人間には魔力を使うことができる「器」がある。それを互いに理解し合った人間と精霊は、契約を交わし始めたのだろう。

話がずれたが、ようは魔力があれば精霊。なければ人間。ということだ。魔力の感知は、一回でも精霊とかかわったら触る程度で分かるだろう。

「何！？人型の精霊だと！？・・・ほう、未契約か。坊主！残念だったな。こいつは俺が契約させてもらうぞ！」

「あゝ、やめといたほうがいいぞゝ」

あのおっさんが言っている「契約」とは、精霊の力を使うための儀式である。

まあ儀式と言っても、お互いが承認したらできる簡単なものだけだな。契約の完了した場合、どこかしらに証が付く。ちなみにルナは契約してないから証はついていない。

・・・そっぴや人型の精霊は珍しいのか？

他の精霊は見たことないからな。マーカスさんが羨ましが理由が少し分かった気がする。

「ふん、下手な脅しを。おいお前、俺と契約しろ」

ああ、俺は忠告したからな。隣でマーガスさんが何か騒いでいるけど、なんとなく分かるので無視。

バカみたいに純粋なルナは、契約のために魔力を練り上げている。俺が言えばやめると思うけど、あのおっさんは身をもって知ったほうがいいだろう。

「Contract>契約<」

おっさんが光始めた。

「・・・おお・・・！これは凄い！魔力があふれてくる！」

「す、すげー・・・。兄貴！凄いですぜ！」

「まさかこれほどとは・・・！」

「初めてみたぜ！」

口々に素直な感想を述べている。まあルナの魔力は多いなんてもんじゃないからな。

「ふふっ、ははは！ふははは・・・ぐっ・・・ぐはっ！」

・・・やはりか。突然おっさんが血吐き始めた。

「あ、兄貴！！」

他の三人の盗賊はおっさんに寄りそった。マーガスさんも困惑している。それに比べて、ルナはいつも通り無反応だ。

「くっ、このアマ！何しやがった!？」

どうやらルナがやったと勘違いしたらしい。あながち間違いではないのだが。

「私は契約しただけ」

そういうと、背を向けて歩いてきた。

「嘘つくな!」

まだ寝たりないのか、ルナは途中途中あくびしていた。

「嘘じゃないよ。そのおっさんがルナの魔力を受け止められなかっただけ」

人間の器にも限界がある。

もし受け止められなかったら、魔力は溢れ、体を巡る。人間の体は、魔力を受け止めることはできるが、所詮それは器だけ。よって溢れた魔力は体を破壊する。

ちなみに、肉体強化魔法は、自殺と同義語だ。

「さて、そろそろ行きましよう。マーガスさん、出してください」

ルナが一人戻ってきたところで、俺はおじさんに声をかけた。

しかしマーガスさんは一人騒いでいる。はて？何故だ？

「このクソガキ!!」

振り向くと二人が武器片手に俺へと向かってきた。もう一人は弓による遠距離攻撃。

マーガスさんが騒いでいたのはコレか。

隣を向くと、俺の頭より一つ小さいルナが見上げていた。

「アキラ、どうするの?」

「逃げるのが一番だけど、状況が状況だしな……。しかたがねえーな。行くぞ、ルナ」

ルナはコクリと頷いた。と同時に、光に包まれた。

?

プロローグ（後書き）

下手な作品でスミマセン

プロローグ長くな？という疑問については笑って流してください

次回の一言

ルナ・プラネット

「ランランルー」

誤字・脱字があったら指摘お願いします

学園と隕石注意報（前書き）

同じく改めました

何かあったらアドバイスお願いします

学園と隕石注意報

森を抜け、やっと俺たちは学園のある街へと移動してきた。

「おじさん、ここでいいです」

街に着いたし、後は歩いていっても遅くならないだろう。

「いやいや、さっきのお礼もあるし、学園まで送ってやるよ。もちろん料金もいらなかな。」

「お金はさすがに払いますよ。それにお礼と言っても、あれは俺たちが巻き込んだだけですし・・・」

「いいから、いいから。命の代金だと思えば軽いものよ」
ほんとにたいしたことないのに。

俺はまた眠り始めたルナを見ながら、さっきのことを思い出した。

・
・
・

「おい・・・、何でなんだよ・・・?」

山賊たちはうるたえていた。確かにその気持ちは分からんでもないな。

「なんで契約なしで武器化できる!?!」

(・・・やっぱりそうか)

俺は内心苦笑した。

右手を見ると、片刃の細長い剣・・・もとい太刀が、白銀の輝きを放っている。

魔力があると言っても、魔法が使えるわけではない。

できるのは「魔力で武器を創る」こと。しかし創るということは魔力が必要。そして魔力は精霊と契約することで手に入る。つまり契約しなければ武器化はできない。

・・・のはずなのだが。

どうやら世界の理は、あっけなく崩されたらしい。

「あの・・・、つかぬことをお聞きしますが、普通は契約なしに武器化できないのでしょうか？」

「あ、当たり前だろうが！」

なるべく丁寧に聞いたのに、乱暴に返してくるとは・・・。どうせ詳しい事は学園で聞けばいいしな。

「はあ・・・、じゃあ受付に間に合わせたいので、来るならさっさときてください。」

思わずため息が出してしまったのは、今後のことを考えたからであって、別に「あの盗賊ベタだな」とか思っていますからね？

「くっ、この化け物がー！」

それを掛け声として、一斉に掛かってきた。

(化け物か・・・)

そう呼ばれるのも仕方がないように感じてきた。

バカ正直に突っ込んできた盗賊Aを避け、足を掛けて転ばした。頭ではのんびりと考えているが、体はしっかりと反応している。

次に盗賊Bが大きく縦に振ってきた斧を、片手で太刀を持ち、そのまま受け止める。

盗賊に斧とは・・・ベタだな

それを押し返し、崩れたところに峰打ちを決める。盗賊Bは、大きく目を見開いたまま倒れていく。

ここまで、わずか三秒。

そのまま残りの盗賊Cを見ると、彼は怯えながら弓を乱射してきた。それを時には避け、時には払って無傷で済ました。

防ぎ終わったときには、俺の周りは弓だらけだった。

「よく一人でこんなに放てるな」

感心してしまった。弓の腕だけなら城の兵士としてやっていけるだろう。

「ば、ばけものー！」

盗賊Cは、まるで悪夢を見たような顔で逃げてった。

「仲間を見捨てるのかい？」

問いかけても答えない。まあ当然だよな。俺は足元で寝ている盗賊Aに促した。

盗賊Aは盗賊Bを連れて逃げていった。

・
・
・

「よし着いたぞ。短い間だったが、色々とお世話様
どうやら回想している間に着いたらしい。」

「いえ、こちらこそ。わざわざすみません」

俺はルナを起こしながら挨拶をした。

「おいおい、何であんたがお礼する。あんたは俺の命の恩人だよ。

こっちがお礼言う側だ」

ルナは起きない。

「そんな大げさな。あとさっきの戦いは他言無用でお願いします」

俺はルナを起こしながら返答した。

「未契約での武器化の事かい？分かったよ、それであんたの役に立
てるなら大歓迎だ。でも何でだい？」

・・・ルナは起きない。

「契約なしの武器化は珍しいので目立つと思います。あんまり目立

ちたくないので」

俺はルナを起こしながら理由を述べた。

「珍しい、というか不可能なことだよ。一体どういう仕掛けだい？」
「……ルナは起きない……」

「まあそれは秘密です」

俺はルナを起こしながら誤魔化した。

「秘密ならしょうがないな」

「……ルナは……起きない……」

「ええ、スミマセン」

俺はルナを起こしながら……起こしながら……起こしながら……起こしながら……
ル……ルナは……おき……ない……

「いい加減に起きろー！！！！」

俺はルナの胸倉を掴んで大きく上下に揺すった。

ゴツンッ

ルナの頭が馬車の天井にぶつかった。

当たり前だ、狭い馬車のなかで寝ていたルナを上下に揺すればぶつかる。

ルナは頭をさすりながら目を開き始めた。

「おはようルナ」

「……」

「もう一回ぶつけようか？」

「アキラ、大変よ」

「よし、何事もチャレンジが大切だな。何が大変なんだい？」

「隕石が降ってきた」

「大変なのはお前の頭だ！」

「隕石注意報よ」

「何そのあるだけあって結局出番のない注意報！？いったいどこの世界で使うの！？」

「私の世界よ」

「どこの独裁者！？アレかな、この世界は自分を中心に回っている宣言かな！？」

「違うわ」

「じゃあ何だよ」

「私の頭に世界が広がっているのよ。」

「今度一緒に脳外科行こうか」

「じゃあ何で頭が痛いのか？」

「寝ぼけてどこかにぶつけたのではないですか？」

「アキラ」

「なんだよ」

「隕石注意報のアラームどうしよう？」

「まだその話をするの！？」

「どうしよう？」

「ランランルーにでもしなさい」

振り付けをしながら返事した。

「頭大丈夫？」

「お前にだけは言われたくない！！」

マーカスさんはまたもや爆笑していた。しまいには「あんたたちお笑いの道を目指したほうがいいのではないか？」と言われる始末だ。勘弁してくれ。

マーカスさんを見送り、俺たちは学園へと向かった。

第一感想

「でか・・・」

まあ薄々予想はしていたけど、ここまでとは・・・バブル時代の大家豪もビックリだよ。

外見の特徴としては、戦闘訓練用の広い校庭とは別に、散歩用の庭がある。学校の壁には魔力耐性の高い鉱石を使っているようだ。

歩くたびに揺れる大きいダブルメロンに、肩で切りそろえた緑色の髪・・・って、アレ？

「君？どうしたの？」

「おお！！！」

いつの間にか俺の前に人がいた。しかも美少女。

「っと、そんなに驚かなくてもいいじゃない」

言葉だけ聞けば、すねているor怒っているのどちらかだが、幸い顔は笑っていた。

「あ、すみません。正直ビックリしたので」

「あはっ、素直だね。で、君は何していたの？制服じゃないところを見ると・・・観光客？うちの学園も有名になったものだ。あ、でも中に入るのはNGだよ。関係者オンリーだから」

なんかひとりでに納得し始めた。

「ええっと、観光客じゃなくて、今日からこの学園にお世話になる者で・・・俺はアキラです。アキラ・シグレ。こいつはけいや・・・精霊のルナ・プラネットです」

契約精霊と言おうとしてやめたのは、契約していないからだ。俺はまだ死にたくない。

「精霊って・・・その美少女が!？」

「・・・やっぱり人型の精霊って珍しいのか？美少女に関しては見た目だけと言っておこう。」

「ああ、ゴメンゴメン。精霊はたくさん見たことあるけど人型は片手の指ほどしかないから。しかも美少女ときた。隅に置けないね」
「マーカスさんといい、一体何を想像しているのだ・・・」

「おっと私も名乗らないとね。私はリリーナ・リムロック。一応この生徒会長をやっています。気軽にリナって呼んでいいよ」
「そのしゃべり方は語尾に音符が付きそうなくらい弾んでいた。てか、付いている。そしてこの匂い。ルナのようなソープではない、上品で甘いローズの香り。」

「ところでリリーナ先輩」

「呼び捨てでいいよ」

「俺は何かしら入学試験を受けなければならぬのですか、リリーナ先輩？」

「そうだけど簡単なことだよ。学園長か私が認めればOK。あと呼び捨てでいいよ」

「具体的に何をすればいいんですかリリーナ先輩？」

「ある者は力を示し！またある者は知恵を示した！それについては個人の自由だよ。あと呼び捨てでいいよ」

「そうですか、ではしばらく時間をいただけませんかリリーナ先輩？」

「いいよ。あとアキラ君はSなのかな？放置プレイかな？残念ながらその程度で私を落とせるなど不可能だよ！」

「その言葉、俺が言いたいですよ！久々にボケに回ろうかな〜と思っていたのに、いつまでもツッコミ入れなくて放置プレイですよ！

俺の心は早撃ちで拳銃を落としたガンマン並みにアセアセですよ！」

「大丈夫だよ。ツッコミという名の銃弾は早かったから」

「その銃弾は見事かわされてカウンターバレットですよ！」

「私の弾丸は無線で遠隔操作が可能なのだよ」

「どこのファンネル！？オールレンジ可能なの！？」

「??? ふぁんねるって何？」

おっと危ない。つい暴走してしまった。

無意識なのか首をかしげるリリーナ会長は小動物みただった。
本当に年上ですよね？

「よし、決めた」

「？」

いきなり決められても。

「入学試験はこれから私をキュンとさせれば合格！」

「誰得！？」

何の乙女ゲームだよ。つか、俺はそんな主人公スキルを持ち合わせていない。

「大丈夫！親切に簡単な選択肢を用意したから」

「それはありがたいです」

これなら俺でもなんとかなりそうだ。

「1、愛の告白 2、一世一代の告白 3、世界規模の告白」

「告白統一！？簡単なハードルが高いし！てか、世界規模の告白って何！？」

「世界も揺るがす告白だよ！目指せ！世界征服！」

「もう告白の原型すらないし！告白で世界征服できるなら世界がいくつあっても足りませんよ！」

「愛に勝るものはないのだよ！」

「できればその言葉は違う場面で聞きたかった！」

ああ、駄目だ、ルナの後にこの人だと精神が持たない。

「・・・リナ先輩」

「！！！」

「！？？」

なんか反応したぞ、この人。

「合格！！！」

「早！！？」

「いや、まさか私がドキツとするとは。君、プロだね？」

「何のだよ!？」

「さらにそのツッコミスピード。師匠は有名な人？」

「ツッコミに有名も無名もあるの!？ツッコミは独学です!」

「何!？独学でその腕とは・・・。百人に一人の天才だ」

「天才の名をそんなのに使わないで!」

ツッコミなんてこの「天然眠り姫」といれば、誰だって身に付く。

芸人が泣いて喜ぶツッコミ練習用精霊。一週間後には本当の涙を理解するだろう。

「まあともかくこれで君もうちの学生だよ。学園長の承認もらいに
レツッゴー!」

・
・
・

途中で色々聞いた。

どうやら精霊は多種多様なものらしい。

あるものは鳥。

またあるものは虎。

もちろん犬や猫などの小動物もいる。

その中でも最も注目されるもの。

それが人間。人型だ。

他の種類は特に関係なく存在する。

しかし人型は魔力が高い精霊しかなることができない。

よって人型の精霊は珍しく、世界に100いるかないか、という
ところらしい。

・・・面倒なことにならないといいが・・・

「ところでどういう生活を送れば人型精霊と会えるの？」

「こいつと出会ったのは偶然のようなものでして・・・。」

間違いいではない。こっちの世界に来たら偶然出会ったのだ。多分・

「ふん。それにしてもルナちゃんは相当な天然だね」
「分かります？」

さつきも野球らしき遊びをしている男子学生が、誤ってボールをこちらに飛ばしてきたのを拾ったところを、「すみません、ボール回してください」と言われたものだから、凄い勢いでカーブ（回す）掛けて返した。

その後スカウトが来るわ、来るわ。あの中にどさくさに紛れて告白したやつもいたな。

それを何に勘違いしたのか「アキラに聞いて」と言っ、巻き込まれた俺。

しかしあのカーブは凄かった。

スピード A

コントロール S

スピン A

メジャー入りできるぞ。

その本人は何か上見ているし。

「どーした？」

「アキラ」

いきなりルナが踊りだした。しかも「ランランルー」って・・・頭大丈夫か？

「アキラ君！上！避けて！」

「ふえ？」

上を見ると女の子が・・・女の子が・・・

ズドン

? 落ちてきた。

学園と隕石注意報（後書き）

とりあえずここまではストックがあるので、早めの更新です

次回の一言

アキラ・シグレ

「話せば分かりあえると俺は信じている」

早速お気に入り登録していただいた方、ありがとうございます

誤字・脱字があったらお願いします

入学は編パンに彩られて

あれ？周りが暗いな・・・

しかも体が重い・・・、死んだのか俺？

いやいや、開始して三章で終わりってないだろう

手を伸ばせ 神よ、この俺に蜘蛛の糸を掴ませてくれ

ムニユ

ムニユ？

俺の手には不思議な感触が

手に収まる小さな柔らかさ

こんなものこの世に存在しているの？

ああ、アレか、この世界にしかないやつだな

そして鼻に漂う甘酸っぱいラズベリーの香り。

俺は生きているのか？

「っ！・・・この・・・」

アレ？なんか聞いたことのないソプラノボイスが聞こえる。

何はともあれ俺は生きていた。

安心して目をあけると

「この変態があー！！」

ドゴッ

一瞬でよく見えなかったが、俺の前には赤髪ツインテールと

(これは・・・伝説の・・・)

縞パンだけが見えた。

・

「はっ！縞パン！？」

「縞パン？」

よくわからないが俺は急に目が覚めた。

「アキラ、縞パンって何？」

ルナが何か言ってくるが、さて、どう説明しよう。

「いや、実はさっきの女の子の・・・」

スパッ

あれ？何か頬がヒリヒリするな。まるでナイフで切られたような・・・

俺はかすかに残っている理性で後ろの壁を見た。

壁にはナイフ・・・ダガーナイフが

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「ダガーナイフ」

ダガーという呼び名は、古代ローマ帝国の時代に属州だったダキア地方（現在のルーマニアにあたる）の住民たちが使用していたこと

に由来する。日本刀の種類と比較すると小太刀・脇差より小さく、短刀や匕首、俗に言うドスなどに近いサイズである。

刺すことと投げるのに向く。小さいので人体の急所を的確に狙わないと致命傷を与えられないため、武器としての絶対的な威力はあまりない。とはいえ、中世のヨーロッパの騎士のようにプレートアーマーで徹底的に装甲された敵兵に致命傷を与える場合にはツールハンデッドソードやパイクなどを使うよりも、相手を地面に倒して装甲の隙間からダガーを突き刺す方が効率的だったため広く用いられた。このような重装騎兵へのとどめ専用に進化したダガーがステイレットである。また重装騎兵に限らず戦場で致命傷を負った瀕死の負傷兵にとどめを刺して楽にしてやるために用いられたダガーは「ミセリコルデ」（とどめの短剣、慈悲の短剣）とも呼ばれる。

補助的に使用されることが多いが取り回しが容易く携帯にも向くため、初期の連射性の低い銃器を使用する銃兵等も所持していて、これが後の銃剣に発展し、第一次世界大戦における塹壕戦で多くの命を奪った。

近世ヨーロッパの剣術の中には利き手にレイピア等の軽量剣を、もう片方にダガーを持ちダガーで相手の剣を受け止めたり払ったりしながら利き手の剣を繰り出す物も存在する。この種の剣術はスペインとフランスで特に発展した。このような使用法を念頭に作られた防御用ダガーは特にマインゴーシュ、パリーイング・ダガーなどと呼ばれる。また相手の剣を挟み取るなどの破壊することに特化したソードブレイカーも、こういった防具としてのダガーから発展したものである。

左手用のダガーの中には相手の剣を受け止めやすい三本刃のものや、鍔が剣を受け止めやすい形状になっているものも少なくない。

ルネッサンス期のイタリア各都市国家などのヨーロッパ諸国では、護身・装飾・食事用具（当時は食べ物ナイフやダガーで切り分け、手づかみやナイフ・ダガーで刺して食べる方法が主流であった）としてダガーを腰やブーツに差すなど見せる形で携帯することが流行

した。

ダガーは専ら対人武器として作成されたものを指し、対してナイフは一般に多目的切断具である。対人戦闘を主目的としない場合には諸刃はあまり意味が無いので、日常的な用を足すための道具であるナイフの多くでは、刃は片側のみである。

ただし、諸刃状の刃物自体は旧石器時代から見られ、ダガー型のナイフは片側に別の刃付け（荒めに研ぐ、角度を変える等）を行うことで、鋭利な片側で繊細な作業を行い、荒い研ぎの側でロープをこすって切断するなど、1本で2種類の用途に使用できるという利点もあり、ダイバースナイフにはダガー型のものも多く見られる。特にプロユース（専門家が使う道具）のものでは、あらかじめ片側が鋸刃になっているものもみられる「1」。また緊急時には刃の向きを確認せずに使用できる。

ダガーは左右対称であることに関連して、観賞用ないしコレクション用のナイフの題材としても選択される。これら観賞用ないしコレクション用のナイフでは、実用性よりも装飾性を重視しているが、そういったナイフもナイフとしての基本的な機能を持っているか、その機能を持たせることが可能な場合もある。各国の伝統的な刃物はダガー状であることが多い。

~~~~~

・・・は！つい現実逃避をしてしまった。

俺の知っているダガーナイフの知識。今のケースに当てはめると、「投げナイフ」ということになるな。

てか俺の知識スゲーな。

「ごめんなさい、手が滑ってナイフが飛んでしまったわ 死んだ？」

「謝りと同時に生死の確認ってどんなコンボ？」

俺の目の前には「貧乳ツインテール（縞パン装備）」がいた。

・
・
・
貧乳ツインテールが現れた。

アキラはスカラを唱えた。守備力が50上がったような気がした。貧乳ツインテールは笑顔のままだ。

アキラはピリオムを唱えた。逃げ足が150上がるといいよね。貧乳ツインテールは右手にナイフを構えた。

アキラは逃げた

しかしナイフに囲まれた・・・ナイフ？

「ぎゃあぁー！！」

俺の周囲の壁にナイフが刺さった。

「ごめんなさい、手が滑って殺そうとしたわ 死んだ？」

「おかしいよね！滑って殺しそうになったらマリオカートはR18指定になるわ！バナナをナメんなよ！」

「まりお・・・かあと？ごめんなさい、理解できなくて殺すわ」

「ストップ！ストップ！理解できなくて殺人衝動が起きるなら、世界は赤一色だよ！」

ヤバイヤバイ、貧ツインの目がヤバイ。

「ファイアちゃん、冗談でも殺すなんて言わないの」

リナ先輩惜しい！確かにその通りだけど「冗談」と「本気」は違うから！

「分かりました会長。冗談（ ）、（ ）で、は言いません」

「うん、素直でよろしい」

俺は初めて言葉の恐ろしさを知った。

「こほん・・・では改めて、彼女の名前は」

「フィアル・ホークズよ」

「貧ツイン・・・改め「フィアル・ホークズ」はリナ先輩の紹介を遮って名乗った。」

「ちなみにツンデレ！」

「ツンデレじゃありません!!」

あれはツンデレの発言だな。

二人の言い合いを眺めていると、ルナが話しかけてきた。

「アキラ」

「ん？なんだ？」

「自己紹介ってなんて言えばいいの？」

「そうだな・・・とりあえず俺と同じようなこと言え」

どうやら収まったようだ。心なしかフィアルの顔が赤いような・・・

「じゃあこっちも行ってみよう!どうぞ!」

「転校生のアキラ・シグレだ」

「転校生のアキラ・シグレだ」

「ちよつと待て」

俺はルナの肩を叩いた。

「何？」

「人は誰にだって間違いはある。それは精霊も同じだ。よし、気を取り直してもう一回」

「謎の転校生です」

「何があつたのかな!？」

リナ先輩がマーガスさんと同じ状況に陥っている。フィアルなんか目がパチクリして忙しそうだ。

「だってアキラが同じようなこと言えって・・・」

「分かった。百歩譲って俺が悪いとしよう。しかし気になるのはその先だ」

「アキラ」

「なんだよ」

「先のことは誰も分からないわ。今を見ないと」

「大丈夫だ。俺は今を見て冷静に判断している。それより後半の謎の転校生というキーワードはどこからきた？」

「なぞときは？」

「デイナーの後でと言いたいのかな？・・・てか、何で知っているの！？」

まさか・・・こいつも・・・地球

「事件の後よ」

「それ以前の問題だった！？」

こいつはバカだった。それなりに長い(?)付き合いだったのに気付かなかったとは。

しかし少しでもこいつを信じた俺はもつとバカだ。

「こほん・・・では改めて、アキラ・シグレだ」

「ルナ・プラネット」

普通に言えるし！今こいつ俺の顔見てドヤ顔したぞ！？

つねに無表情のこいつの場合、あまり分からないが、俺には分かる！顔は美少女だからドヤ顔したら一部は「萌え〜」とか言うかもしれないが、俺の素直な感想は「イラッ」だ。

「あんたたち・・・カップル漫才でも目指しているの・・・？」

フィアルまで言ってきた。どうすんだよ！と目でルナに訴えると、あいつはかすかに頷いた。これは初めて以心伝心した

「夫婦漫才よ」

「「発展した!?!」」

今の声は、俺とフィアルだ。こいつ、できる。

「何よ」

「ナンデモアリマセン」

急に睨んできたから、つい棒読みになった。あいつ鋭いな。

「とりあえず、これでお互いの自己紹介は終了 仲良くしようね。」

「ええ、よろしく、ルナさん」

「よろしくフィアル」

「では会長、私は教室に……」

「ちよつ、俺には!?!」

「殺すよ、変態さん」

「殺人予告!?!」

そりゃないよ!こつちには心当たりが!……あります。

「それじゃ二人とも、指示された教室に行つて。二人とも一緒だから」

リナ先輩からの指示。ホント手が早いな。

「で、ルナさんはどこのクラスなの?」

「アキラ、どこだっけ」

「2・Bだな」

俺はここに来る途中（気絶前）にリナ先輩から教えてもらったことを思い出す。

……思わず縞パンを思い出したのは秘密である。

「へえ、偶然ね。私も2・Bなのよ。」

「そう」

へえ、そうか。こいつも2・B……

「「え?」」

・
・
「んじゃ、転校生を紹介するぞ。」

「アキラ・シグレです」

「アキ」

ゴスツ

「ルナ・プラネット」

さあ、整理の時間だ。OK・OK。そう慌てるな。場所？ここは2
- Bだ。

俺の右隣にルナ、左隣に担任の「コルト・パーム」先生。ちなみに
男。期待した諸君、残念だったな。

次に周りだ。

たくさん生徒の中には、仏頂面のファイアルも見える。

そして目の前には約30名の生徒の視線が集まる。

ルナに。

「えー・・・、薄々みなさん気になっているルナさんですが、実は
アキラさんの精霊です」

その言葉が終ると同時に、周りが騒ぎ始めた。

「精霊だって」

「精霊持ちかよ」

「しかも人型だし」

「あんなに可愛いのに精霊かよ」

「くそー、あの男羨ましいぜ」

俺に視線が移った時は妬みの視線だった。ありがちな展開だな。

「んじゃ、お前らの籍は・・・」

「先生、これ以上火に油を注ぐ行為はやめてください」

「あれ？違うのか？」

「本気だったの!？」

「冗談だ」

「ビツクリさせないでください・・・」

「2割は」

「ほぼ本気だ!」

これ以上ツッコミ入れたら過労死で死ぬ。今日で何回ツッコミいれたよ？

てか思ったけど、この世界でも「火に油を」って通じるんだな。

「アキ・・・」

「ルナ、これ以上俺を困らせないでくれ」

「ライ」

「次元超えた!？」

何そのギリギリカーブ!?いきなり次元を超えたボケになったよ!おい作者!お前まで俺を過労死に追い込むつもりか!?

〈閑話休題〉

「よし、少しは落ちついたぞ」

「アキライ」

閑話休題

(・・・あのな、物語には法則があつてこの場合は決してリアルの話に触れていけないわけであつてそりゃ確かにお前は・

くしばらくお待ちくださいく

天然キャラで固定されているがそれにも限度がある確かにミスつたらドラック&Back Spaceで消すことはできるしかしだな・くしばらくお待ちくださいく

それでもやっついていいことと悪い事があるそれを分かるようになれそして謝れ

くめんなさいく

閑話休題

「で、先生、俺たちはどこに座ればいいですか？」

「ん〜そうだな。後ろの席空いているから、そこにはプラネットが座れ」

「はい」

「んじゃ、授業始めるぞ〜。今日は」

「ストップ！」

「おいシグレ、授業中だぞ、席に座れ」

「その言葉に違和感を持つてください！」

「お？そういえばお前の席は紹介してなかったな」

「何その自然なボケ!？」

「アキラ、早く座る」

「ちよつと黙ってね？」

「アンタ、早く死ね」

「なんで殺意むき出し!？」

前者はルナ、後者はフィアルである。

「てか、お前まだ根に持っているのかよ・・・」

「あ、当たり前でしょ！あんなコトされて許せるわけがないでしょ!？」

「ん？お前たち、あんなコトってなんだ？」

コルト先生の顔が面白いものを見つけた子供の顔になっている。

「おい！転校生！テメー、フィアルさんに何した!？」

そつだそつだと他の男子が騒ぐ。お前ら何者？

確かにフィアルは美少女だ。あんな出会いではなければ俺だって・・・ヤバい、出会いを思い出した。

「べ、別に何も無いわよ！そうよね、アキラ!？」

おーい！焦って呼び捨てになっっているぞー！余計怪しまれるだろ！しかもそこで俺にパス回すのかよ！？俺にフォロー入れると！？クソツ、こうなったら俺の本気をみしてやる！準備はいいか？ゲームスタートだ！

「ああ、ただ少し・・・」

「あんなコトって、アキラがファイアルのパンツを見たこと？」

ゲームオーバー

「ル、ルナちゃん！」

「ほお、やるなシグレ」

「き、貴様！」

「何て羨まし・・・ハレンチな！」

「それで！一体何パンツだった!？」

「アキラ、縞パンツって何？」

「コッブハツ!!」「」

クラスの男子8割が出血多量。女子は頬を赤く染めている。

「アキラ君？ちよつといいかしら？」

「話せば分かりあえると俺は信じている」

その後俺は廊下で「死ぬ魔法のパンチ」をくらった。その時俺は思った。

ああ、このパンチ、名をつけるなら

死魔パン

？

入学は編パンに彩られて（後書き）

今回は早めに仕上げました

少し無理があつたかも・・・

次回の一言

アキラ・シグレ

「バカな精霊とただの異世界人ですが」

誤字・脱字があつたらお願いします

初めての相手はツンデレ少女!? (前書き)

訂正してて思ったこと

ワードで書いてそのままコピー&貼り付けするので、変な個所が多かったのだと考えました
以後、気をつけます

あと、編集集中に気になったところを直したので、少し文章が違くなっています。ご了承ください

初めての相手はツンデレ少女!?

あの後、俺は痛みと視線に耐えながらホームルームに参加した。そして授業が始まった。ここまではOKかな？
ここからだ。

今日の一時間目は歴史。無知な俺には大切なことだ。
その後の先生の発言が、
これだ

ワン
ツー
スリー

「今日は予定を変更して模擬戦やるぞ」

おかしくない？

しかも俺のところ見てニヤツと笑ったし。おまけに相手は自由で見
学も可だ。つまりほぼ自習だ。

俺？もちろん見学の予定だ。他の人の実力もみたいし。
ここまできたら予想している人もいるのでは？

「ええー、これより」

そう、言わずともアレのパターンだ。

「シグレと」

それは良いとして、

「ホークズの」

もしこの状況を打開できる人がいたら、
「模擬戦を始めるぞ」

・・・変わってくれ

「アキラ、何で現実逃避しているの？」

「何でお前は落ち着いていられるの？」

「私、この戦い終わったら言いたいことがあるの」

「やめて！ここで死亡フラグ建設やめて！」

「トイレ行きたい」

「今すぐ行って来い！」

・
・
・

「さて、そろそろいいかしらあ？」

あまりにイライラしすぎてフィアルさんの語尾がおかしい。

何故こうなったか、気づいている人もいるかもしれないが一応説明しよう。

1、対戦相手は自由

2、フィアルさんは俺に御熱心

3、笑顔で一言「殺らない？」

4、冷静に一言「喜んで」

だって怖いったらありやしない！断れないよ！目が笑ってないし！チキンとか言うなよ！

「初めていいならこっちから行くわよ。ポルン、武器化！」

フィアルの肩に急に現れた猫型精霊「ポルン」が光となって、両腕に張り付いた。

光が収まるとフィアルの両腕には籠手のようなものが。そして何も無い空間から「ダガーナイフ」が出てきた。

現実逃避のために説明しよう。

この世界には精霊は存在するが、契約しているのは一部だけ。それはここの学生も例外ではない。

その代わりをしているのが「仮精霊」という機械だ。

形は様々だが、目的は一つ、武器の収納。

精霊はもともと武器の形は決まっていな。本人に合わせて武器化する。

俺の場合は日本人だから刀なのだろう。ここでは珍しい剣と評価されているが。

つまり精霊持ちは珍しい方である。この学園でも10人位とか。

そしてフィアルは後者、精霊持ちである。

しかし精霊は基本一緒にいるわけではない。

必要なときに呼ぶ。これが普通らしい。

まあ、人型は例外だろう。

俺が知っているのはこれくらいだ。

「死んだらごめんね」

爽やかな笑顔で死刑宣告した処刑人の攻撃で、現実逃避は無理矢理に切断された。

ナイフが右から3、左からも3、合計6本飛んできた。

「先生！死んだら責任とってくださいよ！」

狙いは俺だけだったので、大きく右に飛んだ。

ちなみに外したナイフは空を切って、先生の張った結界に防がれた。

この結界のせいで俺も逃げられない。

「ほら、さつさと武器化したら？」

フィアルは一文字につき一本の割合で投げってくる。今は14本だ。

え？2本多いって？句読点と記号も含むのだよ。2、4、6、8、

10、・・・12本だった。

「ほら！ほらほら！」

ファイアルさんの目がヤバイ。もう「殺」の色で染まっている。

「あー、もう！ルナ！行くぞ！」

俺はナイフの嵐から上手く逃げてルナのもとへ走った。

この世界では「契約なしでは武器化できない」というルールがあることは前回は身をもって知っている。

したがって、離れてもできる武器化をわざと近くでやる。メンドクさいな。

「おにごっこ？」

「この状況下で！？」

「接近させないわよ！」

また俺に向かってナイフが一直線。俺は、某狩りゲーよろしく前転回避・・・って

「ちよつと待て、ファイアル！」

「何よ！？」

「お前さつきから俺しか狙ってないだろう！？」

しかも全部頭狙い。何でそんなに殺意込めているの？すると「何を今さら」と言いたげな顔をした。

「それが？」

「もはやキツパリ！？」

認めたよ！そしてそれが正しいのかのように言いきったよ！

「いやいや！普通は武器化するルナを狙うのが妥当でしょ！？」

「私、あなたに夢中だから」

「その言葉、違う場面で聞きたかったよ！」

こいつにデレはあるのだろうか？そして、もしデレが出た時に俺の首は繋がっているのだろうか？

「ルナ！冗談抜きでマズイって！頼む武器化してくれ！」

ナイフでファイアルの動きが見えないほどの攻撃を、某狩りゲーのハリウッドダイブで回避し、再びルナのもとへ来た。

「アキラ、どこ？」

「冗談抜いたら俺消えるの！？俺は冗談100%なの！？」
きりがないのでルナの片腕を掴むと、ファイアルに向かって走っていた。

「うおおー！」

「ちよつ、あんたバカなの！？」

どうやら俺が自滅すると思ったのか知らんが、ファイアルが攻撃の手を緩めた。

「もらったああー！」

「っ！！」

何かを予感したのか、ファイアルはその場でナイフをクロスにし、ガードの構えを取ろうとした。
でも少し遅いな。

ガツツ

金属と金属がぶつかる鈍い音がした。ファイアルのナイフの間には、特殊な形をした剣、太刀が止められていた。普通なら間に合ったが、使い手の差で間に合わなかった。

俺はそのままバックステップをし、少しだけ間合いを取った。

「つつ〜！あんたどこまで異常なのよ！」

「は？」

質問の意味が分からない俺はマヌケな声を出してしまった。

「は、じゃないわよ！武器化の時間が早すぎるでしょ！」

「あ……あゝ、そりゃ死ぬほど練習したからね」

嘘が顔に出ないように気をつける。どうやら俺の（ルナの）武器化スピードは異常らしい。

当たり前だ。武器化する時の過程である、「体内に精霊を流す」を省略しているからな。

普通の人は、そこから自分で構成する。

その必要のない俺たちは、結果的に速いのだ。

ギャラリーも静まりかえっているし、コルト先生は楽しげな顔をしている。

「今の一秒以内よね……、あの英雄ツールでさえ1.2秒だったのに……」

英雄なんていたのかよ。この世界に何があつたの？

「……ええつと……先手必勝！」

「なっ!？」

ボロが出る前に特攻を仕掛けて誤魔化した俺。

卑怯ではない。戦略だ。

脚力任せに足を踏み出し、一気に間合いを詰めた。この世界に来てからというもの、日常が命の殺り取りだった俺は、結果的に実践による技能を身についた。

ちなみにフィアルの声が出たときは、もう目の前まで詰めていた。

「くっ!」

条件反射か経験のおかげかは分からないが、フィアルはギリギリのところまでナイフを出して防いだ。

さつきよりも勢いがあつたため、今度は鈍い音だけではなく火花も散った。

「くっ……ホントにあんたって奴は……」

「お・・・お前だつて異常だろうが・・・」

金属どうしがぶつかり合っている中、フィアルの力が異常なことに気づく。

こいつは確かに強い。だけど女には変わりない。それなのに男の俺と対等の筋力。おかしいよな？

「くっ！」

二人同時に押し合い、間合いを空けた。

「この規格外・・・一体何者よ？」

「そうだな・・・」

一瞬「通りすがりの仮面ライダーだ。」と言おうとしたが、場違いなのでやめた。

「バカな精霊とただの異世界人ですが」

「異世界人・・・？まあ確かにあんたに常識は通用しないわね」

おいおい、人を化け物みたいに呼びやがって。俺そんなに異常か？

「詰められると厄介ね・・・それじゃ！」

睨みあいには痺れたのか、さっきと同じナイフの嵐を使った。

「刀があればこの程度！」

刀をムチのように振り回す・・・ことはできないので、弾いて避けて、弾いて避けての繰り返し。

「どうだ！」

俺の体は見事スタボロ・・・あれ？スタボロ？

「・・・っ！いつてえー！！」

実を言うとナイフが特殊な曲がり方をして防ぐことができなかったのだ。

「私は同じ技を使うほどバカじゃないよ。」

フィアルが得意げな顔をしている。なんだ？一体どういう仕組みだ？

「それじゃ、第二刃、行くわよ！」

ナイフの嵐が迫る。

「やば！・・・あれ!？」

転んだ。転んだ。大事なことでないけど二回説明しました。

何かを踏んだらしい。こんなトラブルがあってもナイフは待つてはくれない。

「ちょ！タンマ！ストップ！」

焦って出た願いもむなしく、俺の体に突き刺さる。

「痛い！痛い！痛い！先生止めないの!？」

「何を言っている？ここからの挽回だろう?」

「先生は俺に何を期待しているの!？挽回だけに卍解すればいいの!？」

「ばんかい？バンカイ？どういう違いだ？」

「大丈夫です。死神にならない限り関係ありません。」

と言う俺は、もう死神になりかけている。

見た目は元気そうだが、かなりのナイフが体に刺さっている。これ授業ですよね？

(やば・・・これホントに卍解しなくちゃキツいな・・・)

体が痛い。生きているのかも疑問に思えた。ああ、おばあちゃんが
見える・・・

「そっぴやアキラ、お前“魔力循環”しなくていいのか？」

「「は?」」

今の声は俺とファイアル。前も息が合ったな。

でも今回は二人だけではなく、ギャラリーの一同も口を開けている。

「いや、お前魔力循環してないだろ?それでよく体動くなってる。」

関心感心とつなげて言葉を切った。
え？何その魔力循環って？

「あんだ・・・魔力循環してないの・・・？」
よく分からんがこの空気・・・やるしかない。俺は悲鳴を上げる体を無理に起こした。

「・・・ふっ、見せてやろう。これが俺の・・・正・解！」

「なっ！？」

「お？」

最初が俺。次がファイアル。最後がコルト先生である。

「・・・あれ？」

何も起きない。何も変わらない。

「おいルナ、何か違和感はないか？」

「トイレなら行ってきたわ」

「誰が尿意の心配をした！じゃなくて、なんか体が疼くとかそんな感じの！」

「傷が疼くわ」

「何の！？いつの！？誰にやられたの！？」

「・・・そんなの言えるわけがないじゃない」

「・・・そうか・・・ゴメン」

ルナは俺と会う前からあそこにいた。何があってもおかしくないな。
失言だった。

「保健室にいた猫に引っかかれた傷よ」

「言っているし！しかも軽いし！俺が気絶している間何があった！？」

「ハリナ先輩がナイフからアキラを護っていたわ」

「テーマー何しやがる！？」

「何の話よ！？」

おっと、今のルナの声は俺にしか聞こえないのか。メモメモ・・・
「それよりもあんた！」

「なんだよ？」

体が限界に近い俺は、目で見ることで済ませた。

「魔力循環をしてないって嘘でしょ!？」

「ええっと、魔力循環って何？」

何その新スキル?てか・・・

「ルナ!お前何で教えてくれなかったの!？」

そんな便利なスキルがあったなら、俺はあんな苦勞をしなかったのに。

「私も知らない」

この反応は本物だな。

「それじゃあ・・・、その力は素なの!？」

「まあ、その・・・素だな・・・」

「・・・」

「これはまた」

「「マジかよ・・・」」

・・・もしかしてそれって常識なの?

俺はさっき押し合いをしたフィアルの力を思い出した。なるほど、だからか。

そろそろ空気が重くなってきたので、コルト先生に向かって言った。

「あの・・・俺、体が限界なので降参します」

これは本当だ。マジヤバイ。

「黙秘する」

「はあ!？」

「だってここまでおもしろくなつたのに、何で終わる必要がある?」

「何でそこに疑問を浮かべるの!？」

あんた本当に教師かよ！？この世界の就職システムはどうなっている！？

「それ以前に魔力循環はこの学園に入る最低条件だけだ」

「え？」

え？そんなの聞いてないぞ？

「当たり前だろ。お前、入学受験受けたよな？」

ヤバイ、俺の顔凄くマヌケな顔していると思う。

「あんた、まさか」

「何を言っている！俺はまだ動けるぜ！」

フィアルの声が真実に触れる前に叫んだ。ついでに体を起こした。ミシツと音がしたのは無視しよう。・・・痛い。

「だろ？それじゃあ試合続行だ」

笑顔でコルト先生が告げた。Sだ。鬼だ。

「体から血が垂れているけど・・・」

「朝食べたトマトスープだな」

「目が虚ろになっているけど・・・」

「これは魔眼だ」

「頭にナイフ刺さっているけど」

「これ実は二つに割れるブレードアンテナなのだよ。光るぜ！紅く光るぜ！デストロイ！」

最後のやつはここでは通用しないガンダムネタだな。俺はUCを応援する。

そんな俺を悲しい人を見るような目で見る。

「それじゃせめて速く終わらせましょう」

ナイフを投げる構えをとった。この体、もってあと3分だな。フィアルの手がナイフから離れた。さて、少し忙しくなるぞ。

俺はしっかりと視る。そして体に指令を送る。それだけだ。ナイフが近づく。そしておかしな方向に曲がり攻めてくる。

(左手を左角46度に展開 1.2秒後に閉じる)

予測不能のはずのナイフが、吸い込まれるように左手に収まる。

(太刀切り払い 後に背中に構える)

一斉に前から来たナイフが太刀によって払われる。その後、背後から来たナイフを太刀が防ぐ。

(ステップを前に踏む その後瞬時にしゃがむ・・・いや、飛ぶ)

体を前に進め、体を浮かす。すると先ほどいた場所には上からナイフが降り、体の真下にナイフが過ぎて行った。

この時間、およそ3秒。

跳躍後、すぐに地を蹴り、間合いを詰めた。

そして現在、太刀の峰はフィアルの首に触れている。

「え？え!？」

状況についていけないフィアル。

「・・・」

それを黙ってみているコルト先生。

「・・・へ？」

もはや何が起こったのすら分からないギャラリー一同。
そこに俺の一言。

「あ、キメ台詞忘れた」

初めての相手はツンデレ少女!? (後書き)

初めての真面目な戦闘シーン

伝わりにくかったらスミマセン

あと、テスト期間に入るので一週間ほど更新できません

次回の一言

ファイアル・ホークズ

「仲のいい人は私をそう呼ぶの。だから・・・アンタとはチームを組むからOKしただけだかね! 変な意味でとらえないでよ!」

誤字・脱字あったらお願いします

イレギュラーという実感（前書き）

テストが終わったので更新しました

今回は見直しをしたので多分大丈夫かと・・・

イレギュラーという実感

俺は今現在、学園長室にいる。隣には順にルナ、フィアル、なぜかリナ先輩。

左の本棚近くにコルト先生がいる。

そして俺の正面。

学園長のエリザベス・ホワイト。

「さて、そろそろ話してもらおうか？」

学園長の口が笑う。目は変化なし。

「何を話せば？」

「心当たりがないのかい？」

「いっぱいありすぎて」

「そうかい。それじゃあ全部だ」

「プライバシーの侵害ですよ」

「不法入学はプライバシーの侵害ではないのか？」

それはリナ先輩が原因だろう。チラツと見ると、手を合わせている先輩と目が合った。

「さっきの戦いのことですか？」

「分かっているではないか。」

どうやら異世界人ということは何談で通されたいらしい。

「と言われても、どこから話せば」

「ではこちらから質問しよう」

そういうと一度咳払いをし、口を開けた。

「その眼は”魔眼”なのかい？」

・・・そういうことか。つーかこの世界にそんな物騒なもの存在す

るのかよ。

「学園長はどう思います?」

「そうだな。話を聞く限りでは、フィアル・ホークズの技を完璧に避けきつたらしいな。」

そこで一旦間を置く。

「そうなると”先読みの魔眼”か”解析の魔眼”か」

分かりやすい名前だな。ツツコミを入れるところもない。あえて言うなら「シンプルすぎだろ!?!」だな。

「で、君はどっちだい?」

おもしろそうな目で俺を見る。その目には何か期待しているかの様にもみえる。

「俺は・・・」

みんなが俺を見る。

俺は

「魔眼なんて持ってませんよ?」

「「「「は?」」」」

「ふあああ・・・」

その場は4人のマヌケな声とルナの欠伸で支配されていた。

・
・
・

「コホン・・・それじゃあ、あれは特別なことはしてない?」

「ええ、まあ」

当たり前だ。魔眼なんて今初めて知ったからな。

「ということは、お前は自分の力でやったのか?」

「力というほど大げさではありませんよ。ただ「視て」「予測」し

て「動いた」だけです。」

こんなの普通だろ？ドッジボールだって視て「捕る」か「避ける」かのどちらかを選択する。

テニスだって「フォア」か「バック」か「ネット」を選択する。

フィアルだって俺の動きを見てから「投げる」を判断し、タイミングを見計らって「ナイフの嵐」を使った。

同じではないか。

「ただ、つて・・・お前なあ・・・」

はあ、と盛大なため息をつかれた。今のため息はコルト先生だ。

「となると、どちらかと言うと”解析の魔眼”に近いな」

「いや、だから魔眼では・・・」

「ちなみにお前の解析したフィアル・ホークズの技は？」

「え、ああ」

俺はゆっくりと記憶を掘り出す。

「簡単ですよ。ナイフとナイフをぶつけるだけでしょ？」

一応本人に確かめる。

「え？あ、そ、そうよ」

なんかオドオドしているな。いや、ビツクリか？

「そこまで分かった上での君の対策は？」

「対策というか、ナイフは一直線にしか動いてないので、コースを読んだだけです」

「一番シンプルで一番難しい対策だな」

Simple is best. 俺この言葉好きだわ。

「とりあえずは解決した。次は・・・」

学園長の目がりナ先輩で止まる。あの後、リナ先輩と一緒に質問攻

めされたのは余談である。

学園長室から出て、リナ先輩は生徒会室へと向かった。なんでも仕事溜まっているらしい。俺は疲れが溜まっているよ。

「で、野獣」

「せめて人であってくれ」

フィアルの不意打ち。野獣ってなんだよ……。

「それじゃ変質者」

「人だつたらいいわけではないよ!？」

俺は一体どんな目で見られているのだ!？」

「あんたのその眼、ホントに魔眼じゃないの?」

「ああ、残念ながら魔眼じゃない」

魔眼。いい響きだ。欲しいな……。

「……あんた意外に凄いやつ?」

「基準が分からないけどな」

この世界のこと分からないまま戦うのはマズイかも。授業、真面目に受けよう。心でそう誓った俺は、今授業をやっている我がクラスへと足を運んだ。

・
・
・

少し遅れた俺たち三人はクラスメイトに不思議な目をされたが、先生は普通に対応してくれた。

おそらく学園長から事情は聞いているのだろう。ちなみに今の教科は一時間目にできなかった歴史だ。

教科の先生にアイコンタクトしてから、俺に続いて二人も座った。色々と考えたいことがあったので、窓際だった俺は外を眺めてポロっとしていた。

しばらくすると、授業の終わりを告げる鐘なった。

生徒が席を立ち、背伸びをしてから終わりの挨拶をする。

休み時間になってもやることがない俺は机で寝ようとした。その時

「なあ、ちよつといいか？」

「は・・・い？」

振り向くとクラスメイトが大勢いらっしやった。

「さっきの戦いだけどさ！」

俺は関係者である二人の姿を探す。

入口を見ると、ちょうど扉に手を掛けたフィアルがいた。

その手の先にはルナの手が。

俺と目が合うとフィアルは手で「じゃーね」と合図をして出て行った。

（あの女、裏切りやがった！）

そうしてクラスメイトの波に溺れる俺。

・・・何か扱いひどくない？

その後の質問攻めはきつかった。大事なことなので二回言う。きつかった。まあ、適当に流しておいたが。

次以降の授業は考え改めて真面目に受けた。

この世界の教科（この学園の教科）は「歴史」「数学」「語学」「創策」「実技」がある。「語学」は国語のようなものだ。

ここには「理科」or「科学」がないらしい。

そして「創策」。これは文字通り「策を創る」授業だ。

実戦で体を動かすのは「実技」

頭を動かすのは「創策」ということだ。

四時限目の授業が終わり、昼休みを迎えた。さあ、飯だ。

クラスメイトの一部がいないのは購買争いにいったのだろう。

しばしの休息を手に入れた俺は重要なことに気がついた。

「昼飯買わなきゃ・・・」

同じ思いをしているルナを拾って戦場へ行くために、ドアに手を掛ける。と同時に声がかかった。

「あなた、ちょっと付き合いなさい」

フィアルの告白。

「僕たちはまだそういう関係では」

恥ずかしい素振りでする。

ドゴッ

「いいかしら？」

「もちろんです」

俺は顔に赤い跡をつけながら購買へ行き、後に中庭に向かった。なんでもオススメの休憩場があるらしい。

購買？フィアルとルナがいればガラ空きも同然。みんな譲ってくれたよ。

代償の俺への背中に刺さる殺気は辛かったけど。

フィアルのオススメスポットは中々だ。

中庭の奥に木で囲まれたエリア。風通りはいいし、木で少し遮られた日の光は幻想的だ。

そこに腰をおろし、昼食をとる。

今日の昼飯は日本で言うカツサンドと焼きそばパン、それとフルーツジュースだ。ルナはハンバーガーみたいな食べ物とカップサラダ、飲み物は紅茶。

「で、話していいかしら？」
サンドイッチを一口食べてからフィアルが口を開いた。サンドイッチには猫がかじったのではないかと思うほどの、小さな食べ跡が。こつこつとこは女の子だな。

「で、殺していいかしら？」

「話が変わっているよ！？使い回してみたいになっているし！」

こいつこそ魔眼もっているだろう。人の心を読みやがって。

「・・・話を戻すわよ」

カップジュースを一口飲み、続けた。

「アキラ・シグレ。ルナ・プラネット。私と一緒にチーム組まない？」

「チーム？」

「もぐもぐ・・・」

聞きなれているはずなのに思わず聞き返した。ルナは現在進行形で食べている。

「そ、チーム」

またサンドイッチをほおばる。本当に小さい口だな。あれで限界なのか？

「この学園では個人力よりチーム力、団体戦を重要視しているの。そこで3人1チームを作って対抗戦をする。それがここの伝統行事の一つ、”組織戦”」

確かに個人戦より団体戦の方が、この先多いだろうな。

「時期は春、夏、秋、冬の季節につき一回。年に四回行われるのよ。どうやら季節と日時の数え方は日本と変わらないらしい。」

「なるほど。で、フィアルはチームができなかったと。」

「う、うるさいわね。だってみんな避けるのよ。寄ってくるのは下

心丸出しの男子だけ」

それと。とフィアルがつなげる。

「ファイ、ファイでいいわよ」

「ファイ・ファイ？」

「確か腰にナイフが・・・」

「すみませんでしたフィアルさん！」

「ファイ」

「え？」

顔を赤らめて言った。・・・クラツとしてないぞ！ちょっとドキツとしただけだ！

「仲のいい人は私をそう呼ぶの。だから・・・アンタとはチームを組むからOKしただけだかね！変な意味でとらえないでよ！」

ここでまさかのツンデレ発言かよ。そういえばリナ先輩もそう呼んでいたな。

「分かったよ、”ファイ”」

「わ、分かればいいのよ」

そっぽを向くファイア。耳が赤いのは気のせいかな？

「で、俺、ルナ、ファイアの三人でチームを組むのか？」

「そうしたいのは山々だけど・・・」

苦い顔をして目をルナに持っていく。

「ルナちゃんは人数にカウントされないのよ」

「まあ精霊だからな」

苦い顔をしていたのは、ルナに対して失礼と思ったからだろう。当の本人はもくもくと焼きそばパンに・・・

「それは俺のだろうが！」

食べかけの焼きそばパンを取り上げる。するとルナがムツとした顔で上目遣いをする。

「落ちていた」

「置いてあった、の間違いだろ！そしてお前は落ちていたものも食べるのか!？」

「食べ物だったら」

「じゃあ質問しよう。目の前に食べかけのパンが落ちている。お前はそれを食べるか？」

「誰の？」

「は？」

意味が分からん。

「その落ちていたのは誰の？」

「・・・ファイアのだでしょう」

「私はそんなバカじゃないわよ」

隣でファイアが口をとがらせる。

「じゃあ食べないわ」

「理由は？」

「ファイアに悪いもの」

「・・・そうか、では学園長の場合は？」

「食べないわ」

「・・・マーガスさん」

「食べないわね」

「・・・クラスメイト」

「失礼なもの」

「俺」

「いただくわ」

「何故だあー!!」

思わず地面に頭を叩きつける。

「結局は俺のものは食べるだけだろう！」

「違うの？」

「何で当然のような顔しているの!？」

ルナは首を傾げた。くそっ、動きが無駄に可愛い。

「どうせ食べかけでしょ。あげなさいよ」

フィアが横やりを入れてくる。

「今度から気をつけるよ」

注意してから渡す。

「バレないようにやるわ」

「行動に気をつける!!」

と言いながらも渡す俺は甘いのか？

でも考えてみる。美少女二人に攻められて対抗できるか？そんなことできるのはラブコメ主人公だけだ。

俺はせいぜい理性を保って普通に対応することだけだ。

「話をまとめると、あと一人足りないのよ」
いきなり戻ったな。

「でもそんな俺たち（ルナ）とお前フィアがいれば」
男子なんて寄ってくるだろう。

「そう、脅して引き込められるわ」

「かなり物騒！」

何を考えているコイツは!?

「え、違うの？」

キョトンとした顔になる。こいつも天然かよ。

「あんたと私の力を持ってすれば・・・」

「やめる！やめとけ！やめてください！お前とルナがいたら、違う考えを思いつくだろう！」

「違う考え・・・分からないわ」

こいつ自覚なしか？大物だな。

「とにかく、あと一人フリーな奴を見つければいいのか？だったらルナ先輩とか」

聞くとフィアはすぐに首を横に振る。

「生徒会は優勝チームと戦うことになっているのよ」

そこまで強いのかよ。思わずリナ先輩が戦っているのを想像する。無理だ。できない。

「そういうわけで、あんたも協力しなさい」

「あのなあ・・・転校生の俺に、誰がいいのか分かる訳ないだろう」

「もともと、あんたの頭には頼るつもりないわよ」

ファイアは俺をじっと見る。

「あんたのその観察力を頼りにしているのよ」

自分の眼をなぞる。

「こんなの大した観察力じゃないよ」

「大した、の基準がおかしいのよ、あんたは。」

またため息をつかれた。それはもう盛大に。

「何だよ。人をバカみたいに見やがって」

「色んな意味でバカね・・・」

「ねえ、怒っていいかな？怒っていいよね？」

そろそろ我慢の限界だ。俺はゆっくり立ち上がった。

バンツ

俺の頬にヒリヒリと痛みが走る。

ファイアは俺をみて驚愕の顔をしている。ルナも口こそ変わらないが、目は普段からは想像できないほど大きく開いている。

ツーツと熱いものが、ヒリヒリしたところから流れる。俺はそれを指で触れる。

ヒリヒリする部分に触れると、ピリツとした痛みを感じた。

触れた指を見ると赤い血が付いていた。

「あんたが転校生か？・・・この程度の殺気にも気付かないとはな。精霊に頼りすぎのバカか」

声をした方、後ろを振り向くと、そこには銀髪の男が拳銃をこちらに向けていた。

「誰だお前？」

別に油断をしていたわけではない。殺気というほどでもなかったから放っておいただけだ。

「ザコに名乗るつもりはない」

「そう言うなって」

適当に言いながら相手の力を見極める。武器は拳銃。大きさはハンドガンくらい。

「ソーマ・アーン・・・」

「ソーマ？・・・あ、こいつか」

「勝手に教えるな、ホークズ」

「いずれ分かるでしょ」

どうやらこの銀髪の名前は「ソーマ・アーン」らしい。

「で、そのソーマ君が何の用だ？」

「ホークズが転校生に負けたという噂を耳にした。が、拍子抜けのようだ」

と言って、ソーマは背を向けた。

「・・・確かにお前はルールなしの殺し合いだったら強いかもな」

「・・・どういうことだ？」

体を向けず、顔だけ向く。

「お前はただの野獣だ」

神土的な笑顔を向ける。

バンッ

音がしたときには俺は体を逸らしていた。

ソーマは次々と弾を撃ち出す。

俺は避けながらも間合いを詰める。いつもと同じ戦法。

「へえ、意外に速いね。」

あと数歩。近づいても撃つなら、回り込んで首を打つ。避けるならフェイントを入れて追撃する。

しかしどれも違かった。

「おもしろい」

ソーマは拳銃を持ったまま、接近戦に備えて構えをとった。

「お！？」

予想外だったが気にすることではない。あいつは銃による後方支援型。接近戦なら負ける気がしない。

俺の裏拳とソーマの腕がぶつかる。

実際負けなかった。

でも勝ったわけではない。

「お前・・・接近戦もできたのか？」

俺の拳を一瞬防ぎ、横に流すソーマ。

「こんなの基本だ。飛び道具を使うやつも、これくらいは習う」

「基本だけじゃ俺の拳を受けられねーよ」

こいつは相当な実力者らしい。いくら俺が半年しか訓練してないといっても、平均よりは上だと思う。それに俺の拳は森にいた大熊も吹っ飛んだぜ？不意打ちだけど。

「俺は天才だからな」

「うるせーぞナルシ」

こう言っている間も俺とソーマの間では、互いの拳と脚がぶつかり合っている。

拳銃使いとは思えない瞬発力だ。

「まあこんなものか」

ソーマがバック転をして距離を空ける。

「逃げんのか？」

「今回は様子見だ。後でお前の担任から連絡が入る。聞いておけ」
そういうと、今度こそ背を向けて帰って行った。

とりあえず状況確認。怪我は最初のかすり傷だけのようだ。

「いやー大変だった」

わざとらしく腕で額をぬぐう。

「いや、あんた何で冷静なの？」

「いやいや、俺の心臓はバクバクだぜ？」

「その言葉が一番緊張ないのよ。」

いつも通りの俺だったら平然といられないだろう。しかし俺が冷静でないといけない。

「・・・」

俺は手でルナを押さえる。

(バカ、殺気がただ漏れだ)

ファイアにバレないように目で注意する。こいつにしては殺気が漏れすぎだ。もしもこいつが暴走したら、俺は止められる自信がない。

「え？どうしたの？」

ファイアは何も気づかなかったようだ。まあ、あのソーマも気づかないほどだからな。

「・・・ごめん」

そう言つとゆつくりと、少しずつ収めていった。

「何でもないよ。とりあえず教室戻るか」

「そうね。あいつも担任が何とか言っていたし」

騒がしい昼食を終え、不満そうにしているルナを引きずりながら教室に向かった。

？

イレギュラーという実感（後書き）

急いで書き上げたので、次回が思いつかない・・・
しばらく時間をください

次回の一言

アキラ・シグレ

「お、お前・・・BLか？」

誤字・脱字あったらお願いします

嫌なこと 考え一つで 良いこと

「かくかくシカジカと言う訳だ。頑張れよシグレ」

「そんな便利機構は現実世界にありませんよ」

冷静なツツコミを入れたところで説明しよう。てかめんどくさいので、回想します。

~~~~~

「ランランルー」

~~~~~

戻りすぎた。こっちだ。

~~~~~

「んじゃ、ホームルームを始めるぞ。てか、めんどうだから起立、礼、で終わりにする」

「短縮しすぎでしょ!？」

思わずツツコミを入れた。だって周りの人誰も気にしないから。

「シグレ。発言する前には起立、礼を入れる」

「起立、礼」

「じゃ」

「待てや不良教師!」

流れに乗って帰ろうとした教師を止めた。

「お前が終らしたろう」

「ハメられたと思っていただけ、予想通りとは・・・」

どこからかため息の音が聞こえた。おそらく俺と同じ気持ちだろう。

「髪留め、どこに落としたかな・・・」

「関係ないし！」

ため息の根源はフィアだった。

「今日どこかで落とされたのよ。見てない？」

「見てないよ。じゃなくて何でツッコミ入れないの!？」

「アレ、攻撃にも耐えられるから結構気に入っていたのよ」

「何その無駄な高スペック!? ファッション用ですよね!？」

「いざという時に使えるのよ」

「アレで防ぐなら最初から避ける！」

フィアと漫才するのは初めてだ。最も、漫才しているつもりではないが。

「お前ら仲良くやれよ」

扉に手を掛ける担任。

「逃げるなバカ教師！」

先生を捕まえて話を戻す。

「とにかく! 必要最低限の事は連絡してください!」

「必要最低限? そんなの明日給料日だから今日は焼き肉パーティーやることと、

ソーマ・アールロンがシグレに「放課後に第二演習場で待っている」

と伝言を残したくらいしかないぞ?」

「ありありじゃねーか!」

「じゃ終わるぞ」

「起立、礼」

クラス委員の号令が始まった。

「ちょっと待とうよ! お願い待って!」

さらっと流そうとした教師とクラス委員を止める。

「あるよね!? 最重要事項あったよね!？」

「焼き肉パーティーのことか? 残念ながら家族でやるからお前は参

加できないぞ?」

「知らねーよ!! 焼肉!? パーティー!? 家族でやる!? 何でお前の家計事情と一緒に扱いな?!?」

「そういえばシグレ、アーロンがお前に伝言していったぞ」

「うるせーよ!!」

~~~~~

というわけだ。ちなみに回想している間、俺は全力疾走真っ盛り。もちろん目的地は第二演習場。

「おい! お前も自分で走れ!」

現在、ルナの手は俺の手の中にある。でもそんなロマンチックな状況ではない。

「・・・」

昼休み以来、こいつの機嫌はよろしくない。

「あいつ、嫌い」

どうやらご立腹らしい。あいつとは言わずともソーマの事だろう。とりあえず立ち止まる。

「あのなあ・・・あれは挨拶みたいなものだって、多分まずこいつの考えを何とかしなくては。」

「確かにあいつはいきなり撃ってきた。でも、命を狙っていた訳ではない。ここまでは理解したか?」

「・・・」

「黙秘ですかコノヤロー?」

「黙秘します」

「わざわざ言わずともよろしい」

「コントをする時間はない。」

「お前は何か勘違いをしていないか?」

「勘違い?」

「そう。お前はソーマが嫌いだから戦わないと言ったが」

コホン、と一旦切り、じらす。これは俺が学んだ交渉術。初歩中の初歩だが。効果があつてか、ルナの目はじつと俺を見ている。

「嫌いだからぶっ飛ばしたいと思わないか？」

ガラッ

「アキラ、何しているの？早く行くわよ」

気づくと、ルナは窓に足を掛けていた。

「ちょ、お前！どこに逝く気！？」

フワッ

飛び降りた。確かここは三階だ。

「おい！置いて行くなよ！」

第三者がいたら「そっちかよ！？」とツッコむだろう。

俺もためらわずに飛び降りる。そして着地。

落下中は特に何もなかったので省略。時間が惜しい。

着地点から第二演習場は近い。走れば一分とないだろう。

走りながら考える。相手の戦闘力を。

精霊持ちかは不明、武器は拳銃。

ここの生徒にしては鋭い殺気に対する反応。素早い動きに対しては、目ではなく殺気と勘で判断しているのだろう。

(すると少し厄介だな)

目を塞いでも意味がない。どう防ぐか考えないと。

目的地が見えてきた。

外壁までも対戦闘用に作られた

先に行っていたルナは見えない。おそらく入場したのだろう。

入口は大きな扉で塞がれている。それをとび蹴りで突き抜ける。もし引き扉だったら痛かったな、と思ったのは余談である。

「オラァー！来てやったぞソーマ！」

入場と同時に叫ぶ。すると

「「「おおおー！」「」」

「おお！？」

歓声が聞こえた。探る必要もない。すぐ近くだ。

「な、何だ・・・この人数？」

周りを見るとファイア戦と比較にならないほどの人数が。おそらく噂を聞きつけた暇人が見に来たのだろう。

よく見ればリナ先輩まで。隣にいる上級生は、先輩の親友だろうか。

「アキラ、殺つていい？」

中央を見ると目をつぶっているソーマと、熱い眼差しで見るルナ。

他から見れば、イケメンに片思いの美少女というところか。実に絵になる。

このまま貰つてはいただけないだろうか？

「遅いぞ。何故お前よりこの精霊の方が早く来る」

「お前に対して何やら熱い想いがあるらしい。どうだ？容姿と能力は保障するぜ」

「生憎、俺は女に興味はない」

「お、お前・・・BLか？」

「喧嘩売っているのか？」

結構真面目に聞いたのだが。お気に召さなかったらしい。

「さて、始めるか」

そついうと右手首にはめてある黒のリングが光った。

光が収まると、右手には例の黒の拳銃が。

「お前、仮精霊なのか？」

「俺に精霊は必要ない。仮で十分だ」

精霊持ちだから強いという訳ではないらしい。

「お前はさっさと武器化しろ」

「待っていてくれるのか？」

「ハンデだ。武器化したら同時に始める」
となると、こいつの奇襲は考えなくていいな。

「ルナ」

「殺っていいの？」

「一応行つとくが、やるのは俺な」

「殺るの？」

「殺さないけどな」

「じゃあ後で私が殺るわ」

「俺に面倒がかからないように殺ってくれ」

俺はルナの手を握る。ほっとおけば勝手に武器化して面倒になるからな。

観客からガチの殺気と歓声が。殺気を感じたが気のせいだろう。気のせいであってくれ。

(何か武器化の合図が欲しいよな)

そう思い、数秒考えて口を開く。

「発動。武器化、太刀」

即席の呪文(?)を唱えた。何かあると安定感があるような無いような。

「承認。武器化、太刀」

ルナが合わせてくれたことに驚いたが、武器化に起こる光で誤魔化された。

右手にはお馴染みの白銀の太刀が。

改めて考えると、髪の毛が白銀だから太刀も白銀なのか？

ではこれから白銀の太刀改め「白銀月光」と名付けよう。

月光はルナの名前から取った。確かルナは月という意味だったと嬉

しいな。

とにかく、この太刀の銘は白銀月光だ。厨二？何それ？

「では、行くぞ」

「上等だゴラ」

？

嫌なこと 考え一つで 良いことに(後書き)

今回は少し短めに(･･････)

一日に何回戦つんだという疑問は、私も執筆中に思いました

次回の一言

ソーマ・アロン

「俺はホラー押しだ」

誤字・脱字があったらお願いします

異世界人VS一匹狼（前書き）

誤字・脱字がありましたら報告お願いします

こんな小説をお気に入りしていただいた方、ありがとうございます

異世界人VS一匹狼

銀の刃と黒の拳銃がぶつかり合う。互いに交差してはぶつかり、何
度も何度も重低音が響く。

流れに乗れなかった俺は、切り払いをして後退する。もちろん切り
払いは黒のフレームによって防がれた。

「接近戦でここまで耐えるか・・・？」
焦りを覚える。

「言つたろ。接近戦でも基本は知っている」

「レベル高いな、この学園は」

レベルが高いのは分かっている。戦闘力だけではなく、学力も高い
からな。

その中でもコイツは飛び抜けているだろう。

「そろそろ俺の土俵で戦ってもいいか？」

言うのが速いか、拳銃の引き金を引く。

(予想弾速・・・は分からないが、標的は右腕に二発)

それを俺の切り札である「観察眼」で読み取る。

念のためもう一度言う。俺の眼は魔眼ではない。

読み取った情報を脳に送らず、脊髄でショートカットする。もちろ
ん意識してやっている訳ではない。体に染みついた結果だ。

拳銃から光が漏れる瞬間、俺は右腕のあった場所を太刀で振り抜く。
銃声音の数秒後に聞こえたのは、硬いものが4つ地面に落ちた。

「今のは勘か？」

撃つた後でも俺から照準を離さないソーマ。

「半分は勘だ」

二つに斬った弾丸を足で払い、

さすがに弾速が分からないとタイミングが分からない。そこは勘だ。あいつが照準を離さないと同じに、俺もあいつの引き金から目を離さない。

俺の観察眼があっても、見ていなければ意味がない。

「ところで、お前のその黒狼銃はただの銃か？」

「・・・黒狼銃・・・？」

「その銃の名前だよ。今付けた」

黒は見た目から、狼は使い手から取った。我ながらいいセンスだ。

厨二？知らん。

「・・・考えておこう」

嫌そうな素振りを見せずに流した。

前向きに考えてくれるのか？

そんなバカな思考も長くはなかった。

再び黒狼銃から火が吹く。

少し反応が遅れたためステップを踏む時間がない。

代わりに太刀を前斜め下に向かって大きく振る。

ガツンッ

演習場の床が砂煙と音を立てて盛り上がる。銃弾は壁となった床に当たり反射する。

「ユニークな防御方法だな」

驚き半分、呆れ半分の顔をして感想を言うソーマ。

「シリアスよりコメディ派なんでね」

刀を再び構える。目を離さず、前を見る。

「俺はホラー押しだ」

・・・これは笑うところ？

そんな疑問に頭を回転させる。

その時には再び照準を俺に向けていた。

(次の狙いは・・・)

アホな思考を停止し、観察眼を凝らす。

(右腕・・・違う、左腕・・・でもない。その間やや左・・・やや左?)

観察結果

99・6%で心臓

「て、ちよい待て!」

俺の叫びが終わると、ソーマは不敵な笑みを浮かべた。

「じゃあな」

言葉が終わるか終わらないかのタイミングで引き金を引いた。

もちろん俺はその前に回避行動をしている。右へ前転回避。

その勢いのまま一気に間合いを詰める。

「逃がさない」

そこに間を置かず追加の弾を発射する。

それを大雑把に動くことで回避した。

もつとも、全て避けられた訳でもなく、かすり傷程度はできた。

しかし、そんなことは些細なことだった。

(ガードごと吹っ飛ばす)

あいつが接近戦にも優れていることは百も承知だ。いくら攻撃しても受け止められる。

だったらその防御を上回る力で打ち勝てばいい。

ダッシュの勢いを殺さずに太刀を左に水平に構える。発砲と発砲の間の僅かな時間を見定める。

この観察眼で。

(初弾から次弾までのタイム・・・計測完了)
そのタイムを頭に体感で叩き込む。

(今だ！)

そしてタイミングを読み、突っ込む。

可能な限りの瞬発力で地を蹴る。

そのまま太刀を左から右へと振り抜く。

「くっ！」

ソーマは避けることができず、ただガードする。

しかし加速のエネルギーを乗せた太刀に耐えられるはずもなく、ゴルフよろしく壁に吹っ飛んだ。

(何ヤードだ?)

そんなバカ思考とは逆に、体は戦闘態勢を解かない。手ごたえが小さかった。

案の定、吹っ飛ばされて演習場の壁に衝突したにも関わらず、ゆっくりとだが立ち上がる。

「俺よりよっぽど化け物だよ・・・」

今考えると一日で3回戦うのって、結構キツイぞ。

「今のは効いたな・・・。結構痛かったぞ」

よく見ると、口は笑っているが目は笑っていない。器用なやつだ。

「俺はお前の頑丈さにビックリだよ」

あれだけの衝撃を受ければ、立つことは無理に近いだろう。てか、地球人なら即死レベルだ。

「ああ、魔力循環していなかったらヤバかったな」

魔力循環・・・すっかり忘れていた。

俺の場合はルナを体に取り込んでいないからできない技だ。

「さてと・・・長期戦はあまり好きじゃないから終わらせよう」

ソーマが動く。

正しく言うとソーマの左手が制服のポケットに入る。

取りだしたのは白のリング。それを右手と同じく左手首にはめる。

「おいおい、冗談だろ・・・」

察しがついた俺は、思わずため息をつく。

見ている人の大半が予想しているだろう。

そして左手首が光る。

（現実逃避がしたい・・・）

そんな気持ちを持ちながら、新たに現れた白い拳銃・・・「白狼銃」を見る。

「待たせたな」

「待ちたくなかったよ」

ソーマは黒の拳銃を俺に向ける。

「第二ラウンド、始めようぜ」

「ファイナルまであるの？」

黒狼銃の引き金を引く。さっき同様、右に飛ぶ。

だが前回同様とはいかない。

着地と同時に、俺の左足に痛みが走る。

原因を追及している暇はない。

ソーマを見ると二丁とも俺へ向けていた。

すかさずステップを踏む。

しかし左足の痛みが足を引き、思うようにステップを踏めなかった。

四つ発砲音が響く。

発砲音が収まると、しばらく静寂が支配する。

あいかわらず俺に銃口を向けるソーマ。

左膝をつきながらソーマを睨む俺。

（この左足の怪我はあいつの銃弾か・・・。着地を狙ってきたな）
この状況は圧倒的に俺が不利だ。

「降参しろ。でなければしばらく動けなくなるほどの傷を負う」
(確かにな・・・)

状況が厳しいのは本人が良く知っている。

現在、俺は左足に銃弾によるダメージを負っている。

そしてさっきの四発をかばった右手に軽い傷。

太刀を持ってなくはないが、長時間は無理だろう。

(今度こそ降参か)

ファイア戦では、あの鬼教師に続けさせられたが。

(今回は誰もいない)

考えがまとまると、俺は両手をあげる。

「あぁー・・・、降参」

「したら私が殺すわ」

「するわけないだろコノヤロー！」

「「「うおおおー!」「」」

その瞬間、ギャラリーが一気に騒ぐ。

「さすが私のパートナーね」

「さすが俺のストレス原因だな」

?

異世界人VS一匹狼（後書き）

次回の一言

アキラ・シグレ

「基本的なこと・・・大事だよな・・・」

創造神〃破壊神<トイレの神様(前書き)

やっとバトル終了だ・・・

創造神Ⅱ破壊神<トイレの神様

「ああー、疲れた」

俺は椅子に寄りかかる。

今日は濃い一日だった。

「アキラ、紅茶いる？」

「おおー、サンキュー」

ルナから紅茶を貰い、一口つける。

この世界の紅茶は、葉ではなく木の実を潰したものを使う。

この紅茶は甘い木の実を使った紅茶なので、もちろん甘い。

その味が俺の心に安らぎを与える。

そして安らいだところで現実に戻る。

「・・・で、何でお前が俺の部屋にいるの？」

最初に言った通り、ここは部屋。学園の寮だ。

本来男子寮と女子寮で別々になるはずだ。つか、それが常識。

しかしこの部屋には俺の他にルナがいる。

「精霊だから」

「ごもつともな理由だ。しかし考えてみる。俺は内も人間で、外も人間だ。そして性別は男。ではお前は？」

「創造神」

「うるせーよ」

もはや真面目にツッコむ気力はない。

「お前の場合、内は精霊。しかし外は人間だ。そして性別は女」

「そして破壊神」

「うるせーよ」

俺は少し間を置いてルナを見る。

「ここで問題だ。男と女が一つの部屋で夜を明かす。さて、予想される問題は？」

「トイレの使い方が違う」

「随分と基本的な問題だな」

「枕投げでハンデが必要」

「やる気なの？ちなみに俺は遠慮しないぞ」

思わずため息が漏れた。もちろん俺の口から。

「お疲れ？」

「現在進行形で・・・」

残りの紅茶を一気に一飲みし、ベッドにダイブする。

目の前が暗くなり、意識が落ちる。

・

・

・

あの一言は、どうやらソーマに対する挑発になったらしい。

「ほう・・・その状態で俺に挑発するとは・・・」

口を引きつらせて言う。俺のメンタルはアセアセです。

「で、何か勝算はあるのか？」

少し小声にしてルナに問う。

「もちろんよ。勝負で勝つ法則を見つけたわ」

「何！？そんなのがあるのか！？」

少し声を荒げたが問題ないだろう。実際、誰も気づいていない。

「相手に降参と言わせればいいのよ」

「ソウダネ、ソウダネ。できれば結果論じゃなくて過程を教えてくださいな。」

「お金とか物とか？」

「それワイロだよね！？どこで覚えたのかな！？」

「歴史の授業で習ったわ」

「うん。俺歴史の時間上の空だったから分かんないけど、多分昔やっていたという意味で教えたわけで、やれという意味ではないと思うよ？」

少し長いツツコミを終えると、しばらく返答が来なかった。

おそろく次の案を考えているのだろう。

「じゃあ潰す」

「それを今実行しているのでは？」

駄目だ。こいつの取りえは容姿と能力だけだ。

「来るわよ」

「え？」

その言葉から一拍遅れて発砲音がした。

俺はルナの言葉に半ば反射的にしゃがんでいたため、ダメージは防がれた。

「何かワンパターンじゃないか？」

さつきからソーマが撃ち、俺が避ける、の繰り返しだ。

あいつは遠距離からも攻撃できるが、俺には近距離しかない。

（しかも近距離戦でも勝負が決まらないって・・・）

あいつは化け物か？

そう考えるとファイアも化け物だな。

ファイアとの戦いは、不意打ちだったに過ぎない。あいつが油断していなかったらキツイ戦いだっただな。

ただ接近しても受け止められる。力技で押ししても単発では効果が薄い。

こちらが不利だ。

技術面だけではない。

体の状況的にも長いのも速いのも無理に近い。

相手は弾丸を何発も撃ちこんでくる。

それをなるべく最低限の動きで防ぎ、その中で勝つ方法を考える。

(特攻をかける?・・・いや無理だ)

普段使わない頭をフル回転する。

(他にはなく、俺にあるもの・・・)

太刀?いや関係ない。異世界人?この際どうでもいい。

そして一つの結論にたどり着く。

(少し卑怯だが・・・まあ勝てばいいや)

痛い足にムチを打ち、無理に走り出す。

弾は俺とソーマを直線で結ぶように移動する。

それをダッシュで避けながら、相手の隙を見つける。

(見つけた)

俺はスピードを上げた。走り回りながらも間合いを詰める。

俺はタイミングを計り、相手へと方向を変える。

全力で地を蹴る。

俺とソーマの間合いは20メートルほど。

この間合いは1秒あれば俺が有利だ。

でも待つてはくれないので、実際に有利なのは飛び道具を持っているソーマ。

そんなことも気にせず突っ込んだ俺は、ギャラリーからバカに見えるただらう。

しかしそれは俺が「近接戦闘」を行う場合。

「ストレスと一緒に・・・」

大きく体をひねり、太刀を振りかぶる。

次の瞬間

「吹っ飛ばえー!!」

俺は太刀を投げた。ドラ エ8の主人公顔負けのブーメランだったぜ。

「なっ!?!」

俺の行動が予想外だったのだから。焦って銃弾を太刀に当ててきた。まあルナがそんなので止められるはずもなく、順調に目的に向かって一直線。

「バカがっ!」

無理と判断したソーマは、体をひねってそれを避ける。

普通はそれで終わり、俺は普通ではない。

なぜなら

「俺たちは人型精霊とズル賢い異世界人なんでね」

ソーマの後ろで眩しい光が放つ。

「今度は何だ!?!」

思わず振り向こうとする。

ドガッ

気が付くとソーマが目の前から消え、鈍い音がした方を見ると壁に当たって気絶しているソーマがいた。

「・・・」

「「「・・・」」」

「死んだかしら？」

「何言っているの!？」

解説しよう。

- 1、ルナを投げる
- 2、当たれば追撃。避けたら3へ
- 3、背後でルナが武器化を解く
- 4、足を攻撃して隙をつくる
- 5、再び武器化して、相手の首筋に寸止めして終了
この予定だった。

「何で攻撃したの!？」

「若さゆえの過ち？」

「疑問持ちながら言わないで!てか、若さを理由にしないで!」

「虫がいたのよ」

「だから？」

「無死した」

「何それ!？無も死も縁起でもないな!」

「大丈夫、痛さは感じない」

「即死!？即死を狙ったの!？どれだけ恨み持っていたんだよ!」
こうして、俺たちの決闘は第三者の手によって締められた。

・
・
・

意識が戻る。どうやら寝ていたらしい。

「・・・トイレ」

生理的なやつを感じた俺はトイレへと向かう。

電気は点けて寝たため、寝ぼけていても転ぶことはなかった。

それよりもルナの姿が見当たらない。散歩だろうか？
そんな事を思いながらトイレのドアを引き

「・・・アキラ？」

「・・・」

そのまま締める。

うん、何も見てない。

ルナは散歩に行った。きつとそうだ。

あれだ。あれはおそらくトイレの神様だ。

ほら、歌があるだろ。トイレにはそれはそれは綺麗な女神様がいる
って。

そう自分に言い聞かせる。

そして一言

「基本的なこと・・・大事だよな・・・」

衝撃で尿意が治まった俺は、そのままベッドで眠りについた。
？

創造神Ⅱ破壊神<トイレの神様(後書き)

章を終えて

アキラ・シグレ

「俺、戦ってばっかの一日だったな・・・」

ルナ・プラネット

「アキラ」

アキラ・シグレ

「何だ？」

ルナ・プラネット

「私は創造神？破壊神？」

アキラ・シグレ

「うるせーよ」

ルナ・プラネット

「絶対神？」

アキラ・シグレ

「何それ!？」

エピソード（前書き）

プロローグと比べると恐ろしく短いですが、
目をつぶっていただきたいと思います

エピソード

「おもしろいヤツが転校してきたものだね」

エリザベスは学園長室の窓から第二演習場を眺めていた。

「ええ。しかし彼を入学させてよろしかったのですか？彼について調べたのですが、何も分かりませんでした」

学園長秘書の「フラン・ヒース」が報告する。

薄い眼鏡を掛けてスーツで身を包んでいる彼女は、できるキャリアウーマンを連想させる。

「なに、うちは実力主義だからな。さっきの試合を見たらう。あいつの実力は本物だ」

「実力主義もほどほどにしてください」

眼鏡を指で上げ、話を続ける。

「確かに彼の力は私も認めます」

「ほう、お前が認めるとは珍しいな」

「ええ、彼なら全学年含めてもトップクラスに入れるかと」

フランは窓の外にいる少年に目を向ける。その彼は、今パートナー

である白銀の少女と何かを言い合っている。

「私もそう思うよ。ただ……」

「……何か？」

エリザベスは言葉を切り、少し考える。

「いや、何でもない」

「そう……ですか」

後味が悪そうに苦笑したエリザベスを見て、失礼にも「こんな顔もするのだな」と思ってしまったのは秘密である。

そんな考えを読みとったのかは分からないが、その後すぐにフランを下がらせる。

そして再び窓辺に寄り、外を眺める。

観客が和気あいあいと楽しそうに出てくる。そんな中でも二人はただ言い争っている。

それを見たい物好きもいるもので、まだ第二演習場の中にとどまっている人も少なくない。

「アキラ・シグレ……、ルナ・プラネット……」

視線を外さずに呟く。

「あんだ達はこの学園にどんな風を吹かせてくれるのかい？」

その疑問は誰も答えない。また、本人もそれを望まない。

言葉は空気となり、ただ虚空に消えていく。

エピローグ（後書き）

物語上の一日を章として扱うとは・・・

自分でもバカだと思えます

次章のストックが欲しいので、しばらく更新できないと思います

ただ、年内には出したいと思っています

どうでもいい事かもしれませんが、特別番外短編「トナカイ精霊と赤服異世界人」を書こうかな〜と思考中です

題名から予想つ・・・かないと思いますが、これはクリスマス編です

ただこれを書くとは本編が遅れるので、時間と相談したいと思っています

一章を見てくださった皆様、ありがとうございました

プロローグ（前書き）

最近受験色々で忙しくて執筆できませんでした

クリスマス企画のアレですが、キャラが圧倒的に足りないの
この章を終えたら再び考えたいと思います

プロローグ

「絶対に嫌です！」

ここはとある国の王座の間。白を基準とした服を着た少女が叫ぶ。蒼色の髪を後ろで一つにまとめ、それを腰に垂らしている。顔は非常に整っており、誰が見ても美少女だろう。

「お前に拒否権はない。いいか、もう一度言う。コースベル国第一王女メアリー・コースベル。コースベル国立スローネ学園への転入を命ずる」

玉座に座り、少女メアリー・コースベルを上から命令するのは、ここコースベル国王ライズ・コースベル。メアリーよりも濃い藍の髪をオールバックにした様は、藍毛の百獣の王を連想させる。

「何故学ぶ必要があるのですか！？私の實力は父上だっでご存じでしょうに！」

父の意図が分からない。そんな目をしている。

「お前は勘違いをしている」

それを冷やかな目で見返し、告げる。

「学園に行くのはお前の實力向上ではない。確かにそれもあるが、本来の目的は」

そこで言葉を切り、笑みを浮かべる。

「お前の婿・・・すなわち優秀な跡取りを迎え入れるためだ」

「なっ!？」

言っている意味が分からない。父は何て言った。

「次期王はその者にする」

玉座にいるのは二人だけではない。周りには大臣、隊長クラスの兵士もいる。なにより・・・

「父上!それは一体どういうことですか!？」

玉座に近い位置から声上がる。

声の主は蒼い髪をセミロングにし、整った顔をしている青年。名をグロウ・コーズベル。この国の第一皇子だ。

「グロウ、いきなり大声を上げるのはどうかと思うが？」

王は鋭く皇子を睨み、黙らせる。

皇子も一瞬体を震わせ、すぐに強気の状態に戻る。

「・・・失礼しました。しかし父・・・国王陛下!何故私ではなく、どこの馬の骨とも分からない者に王家を譲るのですか!？」

父を国王陛下と言いなおし、再び反抗する。

「私ではなく?お前、自分に王の器が務まるとでも思っているのか?」

フツと声に出して笑う王。

「この私のどこに不服があるというのですか!?!私は精霊使いとしても優秀な成績を残しています!それこそあのスローネ学園の主席にも引けを取りません!」

バカにされて少し気が立った皇子は、声を荒上げて反論する。

「ほう、あの学園の主席に勝てると?」

「何がおかしいのですか!？」

さらにバカにされたのが我慢できず、一歩踏み出す。

「おかしいも何も、あそこの主席は次期コーズベル四天王の候補だぞ」

グロウは絶句する。学生が四天王の候補に挙げられるなんて異例だ。周りにいた大臣一同の顔を見る限り、これは一部しか知られていなかったのだろう。

「ではお前に質問しよう。これは王位継承に伴われる儀式の一つだ。そういうと周りは少し騒ぎだす。

「・・・私の答えに納得していただいたなら、王位は私に譲っていただけるのですね?」

「ああ、いいだろう」

王は不敵な笑みを浮かべ、質問する。

「目の前に二つの部屋がある。一つ目は多くの国民がいる部屋。二つ目は少ない国民がいる部屋。片方を救えば片方は爆発する。お前はどちらを選ぶ?」

「そんなこと・・・、私なら多くの国民を救います」

「・・・そうか。メアリー、お前はどうか?」

答えを聞き終わると今度は王女に質問する。

「え?・・・私は・・・」

うつむく王女。

「私は・・・多分・・・どちらも選べないと思います」

「ふむ・・・そうか」

王は顎に手を当て、しばらく考える。

「・・・メアリーよ。選べないのは分かるが、選ばなければどちらも滅ぶことになる」

「分かっています・・・分かっていますが・・・」
メアリーはそこで言葉を切った。

それをどう捉えたのか、王が再び口を開く。

「グロウ、お前はもっと考え方を多く持て」

「な!?!・・・それはどういう意味ですか」

自信満々に答えたものが間違っていた時の顔だ。

「マニユアルに囚われすぎだ、ということだ。次にメアリーだが」
隣で「しかし父上!」と騒いでいるが、王の側近がそれを制している。

「お前の考えていることは正しいのかもしれない。だが、上に立つ者として、いつかは決断しなければならぬ時がある。そしてその決断によってどんな結末を迎えても、それを受け止められる覚悟を持って」

「覚悟・・・ですか」

(そんなことより私は)

無意識に上を見る。そして思い出す。渡されたパンフレットを。

(あの学園に通って、自分の結婚相手を探す。しかも自分が認められた者ではなく、父上が認められた者・・・)

次の日、スローネ学園に黒塗りの馬車がやってきた。

プロローグ（後書き）

次回の一言

アキラ・シグレ

「俺が間違っていた。お前が読むべきものは辞書だ」

台風の日

どこの世界にもつまらないものは存在する。

「人生の全てが楽しい」という人は中々いないだろう。
もちろん俺「時雨暁」こと「アキラ・シグレ」もそうだ。

今の気持ちはまさしく「つまらない」だ。

ただ自分の席に座って話を聞く。
つまり「授業」だ。

これがファンタジーならではの魔法の授業だったら、俺も興味を持つだろう。

しかし生憎、この世界では魔法はそれほど重要視されてはいないらしい。

理由1 魔法発動より通常攻撃の方が速いから

理由2 コントロールは非常に困難だから

理由3 武器化と魔法は並行して使用できないから

理由1については俺も同感だ。

実際使ったところを見た訳ではないが、ここの生徒を見れば何となくそう考えるだろう。

理由2はよく分らん。

何でも、魔力をアーしてアーするらしい。

理由3についてだが。

前に説明したような気がするが、精霊が契約者に提供するのには魔力そのもの。聞いてない？ドンマイ。

その提供された魔力を無意識に武器化する。

だから一人につき一つの武器しか生まれえない。

さっき言った通り、武器化には本人の有無にかかわらず魔力を使用する。

だから魔法を使用したくとも、武器化に持っていかれて魔力がない。

つまり武器化したら魔法は使えません。

・・・まあ俺、というか俺のパートナーは例外だけだな。

「では、ルナさん。この問題を解いてください」

数学教師が一人の生徒を指名し、俺の前の席にクラスメイトが席を立つ。

立ち上がると同時に長い銀髪が揺れた。

整った顔には、どこか幼く、透き通ったガラス細工を連想させる。

俺のパートナーである「ルナ・プラネット」だ。

「・・・32=53です」

「はい、正解です。流石ルナさんですね」

クラスから歓声が上がります。

それに目もやるどころか、顔の表情一つ変えずに着席した。

ルナの特徴その1 驚くほどの秀才

ちなみに俺には、あの問題はサッパリだ。

「凄いよね、ルナさん」

隣のクラスメイトAが話しかけてくる。この人はAだ。Aしかない。
「学力は、な」

俺がこう言うのには理由がある。

ルナの特徴その2 スゲー常識知らず

・
・
・

記憶を戻すこと2時間前。

時刻は7時。

俺は遅めに登校する予定だから、まだ寝ていた。

しかし事件は起きた。

右手に感じる未知の弾力。

ふわりと香る清潔なソープ。

そんな規格外に頭を動かして確かめると。

「・・・」

すぐ右横にルナが寝ていた。

脳を急速回転させて状況を整理する。

(昨日なにかしたか!?)

しかしどう考えても俺に悪いところはない。

制服のブレザーを脱いで終わったのか、上はYシャツにリボンだけ
だった。

下は・・・下着一枚でした。

感想、無駄にエロい。

下着の色？まあ清楚な白い・・・いや、見ていない！

俺も男なので、この光景は目に毒だ。ということで、上から毛布を掛けてやった。

その後、ルナを起こして事情聴取と説教をした。

ルナ曰く、

「何で男と女は一緒のベッドに寝ちゃいけないの？」
もちろんデコピンしてやりました。

・
・
・

この通り、彼女は常識を持ち合わせていない。

授業に飽きた俺は、教室を見渡す。

30人いるクラス。

その中でも目立つのが天然ルナ・プラネットと、

「フィアルさん、ここを説明してみて」

俺から見て右前奥の席から赤髪ツインテールの生徒が立ちあがった。

「はい、そこは」

名前は「フィアル・ホークス」。

こつちの特徴はシンプル。ルナの反対と覚えればいい。

赤い髪を二つに分ける・・・ツインテールをしており、顔は美少女そのものだが、残念なのは胸が小さ

グサッ

いけど今後に期待で百点!

え?赤い液出ている?朝のトマトジュースだよ。

ナイフ刺さっている?朝のステーキだよ。焦って刺したまま来ちゃった。

「アキラ、ナイフ刺さっている」

「うん知っているよ。知らなかったらバカだよな?」

とりあえず落ち着いてナイフを引き抜く。そしてブレザーのポケットから、絆創膏(仮)の緊急処置道具を取り出し、素早く貼る。

最近学んだこと。絆創膏(仮)は俺にとって無くてはならないもの。

処置が済んだところで右前奥の赤髪ツインテールを見る。

「なんか今の落ち着きようが、自分でも怖いんですけど」

「じゃあその失礼な考えをやめなさい」

「俺が何を考えた!?!」

久々の反論。そうだ、こいつは心を読めるわけでもないし。

「言葉とナイフで説明しようか?」

「スミマセンスミマセンスミマセン」

コンマ5秒で謝った。何故ナイフも!?!というツッコミを入れようとしたが、目が結構マジだったので。

それに納得したのか、フィアは満足そうに席に着いた。

この流れを見て何も反応しない教師とクラスメイトは、もう慣れたからである。

ちなみにさつき俺が呼んだ「ファイア」というのはファイアルの愛称である。

ファイアが認めた証だ、と言うと怒るがな。

ちなみに呼んでいるのは、俺、ルナ、そして……

ポーン

放送を知らせる音があった。

クラスの全員が無意識に耳を傾ける。

と言っても、この学園は特殊な仕様によって、壁から音が聞こえるようになってる。

そのため、「傾ける」というよりは「澄ませる」のほうが正しい。

「え、これでもう使える？ホントに？」

急に流れてきた可愛らしい声。

この学園の生徒なら知らぬ者はいない。

「ええー、2学年Bクラスのアキラ君！ルナちゃん！ファイアちゃん！至急、学園長室に来てね！もう一度言うよ。2学年」

ガンツ

思わず机に顔面ドラム。今回は一回で済んで良かったよ。クラスに沈黙が生まれる。

「……アキラ君たち……いつてらっしやい」

先生！何で同情の目で語りかけるの！？

「アキラ、行かないの？」

「お前は空気を読め」

するとルナはキョロキョロと周りを見渡した。

「空気には何も書いてないわ」

「俺が間違っていた。お前が読むべきものは辞書だ」

そうしてルナの肩を叩き、フィアとアイコンタクトをして教室を出た。

・
・
・
「護衛、ですか？」

「護衛というほどではない。ただ、一人面倒を見てほしいのがいてね」

学園長室に入ると、学園長エリザベス・ホワイトとその秘書……ええっと……

「そこからは私が説明します」

眼鏡をクイツと上げて一歩前に出る女性。

「ああ、頼むぞフラン」

思い出した、フラン・ヒースだ。

「最初に言いますが、これは生徒会長であるリリーナ・リムロックの推薦と、学園の総意による決定です」

遠回りに「拒否権はない」ということだろうか？

「ごめんね。いきなり言われてアキラ君たちしか思いつかなかったの」

大きな胸の前で手を合わせ、片目をつむってペロツと舌を出す美少女。

「大丈夫です。リナ先輩のお願いですから」
キラツと歯を光らせる歯もないけど一応やってみる俺。

それに対して「ありがと」と天使の笑顔で迎えるのは、我が学園のアイドルである「リリーナ・リムロック」生徒会長。仲の良い人はリナと呼ぶらしい。

「キモイ」

「なんですかファイアさん？」

「アキラ、きもい？」

「ルナさんは何で疑問形？」

「気持ち悪いなアキラ・シグレ」

「全くですねアキラ・シグレ」

「何であんたら二人まで!？」

どうやら俺の周りには敵だらけらしい。あ、天使もいますよ。

「コホンツ・・・フランさん、続きをお願いします」

「分かりました」

流れを変えるため、俺は咳払いをして先を促す。

フランさんは手に持っている資料に向けて話し始めた。

「実は明日からこの学園に転校生が来ます」

するとフランさんは学園長に目を向けた。学園長は無言で頷いた。

「その転校生は」

コンコンッ

タイミングを見計らったようにドアが鳴る。

「入れ」

「失礼します」

ドアが開かれた。

入ってきたのは女の子。

蒼い髪を一本に結んで腰に垂らしている。元の世界でいうポニーテール。

彼女から感じる高貴な雰囲気は、その堂々とした態度からだろう。

「丁度いい。彼女がさっき説明した面倒を見てほしい転校生だ」

俺たちの横を通り、エリザベス学園長の隣に着いた彼女は大きく一礼した。

「始めまして、メアリーと言います。学園長、面倒を見てほしいというの……?」

その自己紹介に対して、学園長が顔をしかめる。

「メアリー、フルネームでもいいぞ。こいつらはお前の護衛だ」

「護衛?……学園長!護衛はいらないとあれほど……」

最初は悩んでいたが、しばらくすると大きな声を上げた。

「分かっている。分かっているが、もしもの場合を考えるとこちらが責任を取らなければならないからな」

「ですから、この点については私から大臣たちに!」

「大臣?」

慣れない言葉に、今度はファイアが顔をしかめた。

「ほら、さっさと自己紹介しろ。この学園に来たからには姫ではなく一学生と見るからな」

「「姫!?」」

「・・・おなかすいた」

秘書殿はもちろんのこと、リナ先輩も知っているらしい。

当然知らない俺たち二人は驚いた。

あと一人? 知らん。

「・・・はあ、学園長は私に紹介させる気はあるのですか?」
ため息をついてジト目で学園長を見る。

「お前がさつさとしないのが悪い」

この人が笑うと小悪魔が悪魔になるな。でも意外に若く見える。
リナ先輩が美少女ならこの人は美女ってところか?

「・・・分かりました。不本意ですが、これからお世話になる方々
ですからね」

そういうと、最初から正しく着ていた制服を軽く整えた。

この人が着ると制服すらも高価な服に見える。さすが

「改めて、コーズベル王国第一王女メアリー・コーズベルです。あ
る件のために、しばらくこちらに転入させていただきます。よろし
くお願いします」

お姫様だ。

?

台風の日（後書き）

次回の一言

ルナ・プラネット

「アキラはメイド好き・・・？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4952y/>

精霊と異世界人

2012年1月9日00時49分発行